

茨城県教育財団文化財調査報告第215集

島名前野東遺跡

島名・福田坪一体型特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ

平成16年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第215集

しま な まえ の ひがし
島名前野東遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ

平成16年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



島名前野東遺跡全景

序

つくば市は、昭和38年に筑波研究学園都市計画地域の指定を受けて以来、日本の科学技術の研究開発の核としての、さらに、国際交流の拠点としての国際都市にふさわしい町づくりを進めております。

この新しい町づくりの一環として、鉄道整備を進めるのと同時に沿線の地域開発も行い、大量の住宅地を供給しようとする「一体化法」に基づいてスタートしたのが「つくばエクスプレス」プロジェクトで、この合理的な法律に沿って1都3県が今後の町づくりの基本計画を定めています。平成17年に開通予定の「つくばエクスプレス」は、つくばと首都圏を直結し、人・物・情報の交流を盛んにするだけでなく、地域活性化の大きな力となります。

そこで、平成6年7月に県・市・地権者が三者協議で合意に達したのを受けて以来、道路・公園等公共用地・住宅用地・公益施設用地・鉄道用地等を計画的に生み出すこの事業が進められております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財の発掘調査についての委託を受け、平成7年4月から平成12年3月まで熊の山遺跡を、平成11年10月から平成13年6月にかけて島名前野東遺跡・島名境松遺跡・谷田部漆遺跡の発掘調査を実施してきました。その成果の一部は、すでに当財団の文化財調査報告第120集、第133集、第149集、第166集、第174集、第175集、第190集、第191集、第201集として刊行しています。

本書は、平成14年度に調査を行った島名前野東遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位から頂いた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年5月から平成14年9月まで発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字島名に所在する島名前野東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成14年5月1日～平成14年9月13日
整理 平成15年4月1日～平成15年7月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長河久津久のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼調査第一課第一班長 難波和彦 平成14年5月1日～9月13日
主任調査員 稲田義弘 平成14年5月1日～9月13日
主任調査員 飯泉達司 平成14年6月1日～6月30日、
平成14年9月1日～9月13日
主任調査員 寺内久永 平成14年5月1日～9月13日
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、主任調査員飯泉達司が担当した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +6,040\text{m}$ 、 $Y = +20,560\text{m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、抄録の北緯・東経 () 書きは世界測地系座標による。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C……, 西から東へ 1, 2, 3……とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へ a, b, c……, 西から東へ 1, 2, 3……0 とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。

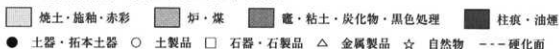
- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 掘立柱建物跡-S B 土坑-S K 堀・溝跡-S D 道路跡-S F ビット-P P
遺物 土器・陶器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本記録土器-T P
自然遺物-N
土層 擾乱-K

- 3 土層と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は600分の1、遺構実測図は60分の1または80分の1の縮尺で掲載した。
- (2) 遺物実測図は3分の1の縮尺とした。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



- 5 遺物観察表の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 計測値の () 内の数値は既存値を、[] 内の数値は推定値を示した。単位は、質量については cm、重量については g で示した。
- (2) 備考の欄は、残存率、写真図版番号 (P L) 及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、炉・甕を通る軸線あるいは長軸 (径) を通る軸線とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した。(例 N-10°-E) なお、推定方向は [] を付して示した。

抄 録

ふりがな	しまなみのいせき							
書名	島名前野東遺跡							
副書名	島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	Ⅸ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第215集							
著者名	飯泉 達司							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
しまなみのいせき 島名前野東 いせき 遺跡	いせき 茨城県つくば市大字 しまなみのいせき 島名字前野3839番地 のいせき	08220 - 389	36度 3分 32秒	140度 3分 8秒	16 ~ 18 m	20020501 ~ 20020913	2,680 ㎡	島名・福田坪 一体型特定 土地区画整 理事業に伴 う事前調査
			(36度 3分 43秒)	(140度 2分 56秒)				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
島名前野東 遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 12軒 土坑 3基	土師器(坏・甕・椀・飯・高坏・ 埴)、須恵器(坏・甕・甍・甌)、 石製品(紡錘車・白玉・双孔 円板・勾玉)、ガラス小玉、土 製品(支脚・白玉・勾玉・紡錘 車・上玉)、鉄製品(鐵)	古墳時代から奈良時代に かけての集落跡と中世前半 の居館跡である。 居館跡を区画する堀は、3 か所のコーナー部分が確認さ れ、一辺がほぼ1町(110m) で方形に廻る。中世前半に みられる方形居館の典型を 示している。			
		奈良・平 安時代	竪穴住居跡 4軒 土坑 1基	土師器(椀・甕)須恵器(坏・ 甕・甍・飯)、鉄製品(刀子)				
	居館跡	中世	掘立柱建物跡 2棟 溝跡 1条	土師質小皿、磁器片(皿)				
	その他	近世・時 期不明	土坑 61基 溝跡 6条 道路跡 1条 溝列跡 1条					

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 基本層序	6
地区設定図	7
遺構全体図	8
第3節 遺構と遺物	9
1 古墳時代の遺構と遺物	9
(1) 古墳時代中期	9
① 竪穴住居跡	9
② 土坑	24
(2) 古墳時代後期	27
① 竪穴住居跡	27
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	48
(1) 竪穴住居跡	48
(2) 土坑	58
3 中世の遺構と遺物	59
(1) 溝跡	59
(2) 掘立柱建物跡	61
4 その他の遺構と遺物	63
(1) 土坑	63
(2) 溝跡	64
(3) 欄列跡	65
(4) 道路跡	65
5 遺構外出土遺物	68
第4節 まとめ	71
写真図版	77

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成6年8月18日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成6年9月19日～27日に現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成8年11月18日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、事業地内に鳥名前野東遺跡が所在する旨を回答した。

平成11年3月31日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、同日、茨城県知事あてに、工着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成14年3月1日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。同日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、鳥名前野東遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県知事から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年5月1日から平成14年9月13日まで鳥名前野東遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は、平成14年5月1日から平成14年9月13日まで実施した。調査経過については下表の通りである。

月	5月	6月	7月	8月	9月
工 程					
諸 準 備	■				
試 掘 ・ 伐 開	■				
表土除去・遺構確認		■			
遺 構 調 査		■			

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥名前野東遺跡は、茨城県つくば市大字鳥名字前野3839番地の1ほかに所在している。

つくば市は標高25～50mの洪積台地である常総台地のうち筑波・稲敷台地により占められている。この台地の南西部を小貝川と鬼怒川が南流している。北部には筑波山系の小河川を集めて南流する桜川があり、流域は水田が広がる良好な農耕地帯となっている。

常総台地の地質は、第四紀更新世の木下層（成田層）、龍ヶ崎砂層及び常総粘土層、関東ローム層から構成されている。木下層は海成の砂質層で、いくつかの火山灰層が挟まれており、その年代から12～13万年前に形成されたと推測されている。その上に堆積する龍ヶ崎層は河川の砂礫層で厚さは最大で7mである。常総粘土層は龍ヶ崎層の上部の泥質層で、両層の形成年代は6～13万年前と推定されている。さらに上部には関東ローム層が重なり、一般的な厚さは1～3mである¹⁾。

鳥名前野東遺跡は、小貝川左岸の筑波・稲敷台地北側縁辺部に位置している。台地には、蓮沼川、東谷田川、西谷田川の小さな水系が樹枝状に入り、随所に谷津が発達し、流域は水田として利用されている。東谷田川に面して標高16～18mの台地上に位置している当遺跡と水田との比高は、およそ7～9mである。

第2節 歴史的環境

当遺跡の周辺には、旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が存在している。

旧石器時代については、東谷田川の支流である蓮沼川左岸の近間神田遺跡²⁾(31)、西谷田川右岸の根崎遺跡³⁾(32)や西栗山遺跡⁴⁾(33)などがあり、ナイフ形石器や尖頭器などが出土している。なかでも、花室川左岸の中原遺跡⁵⁾では、平成11年度までの調査で旧石器の集中地点が10か所確認され、ナイフ形石器・石刃などが出土している。

小貝川左岸の台地及び東谷田川、西谷田川に挟まれた台地で遺跡が確認されるのは、縄文時代前期以降である。西谷田川に面した台地の縁辺部に立地する境松貝塚⁶⁾(2)は、オキシジミ、ヤマトシジミ、ムラサキガイ、シオフキなどで構成され、縄文時代前期から中期の土器や石器が出土している。小貝川に臨む台地上に立地する真瀬山田遺跡⁷⁾(4)からは、縄文時代中期から後期の土器や石器が広範囲にわたって出土している。また、近隣の真瀬山田北遺跡(43)、真瀬山田北遺跡(44)、鎌沼新田長峰遺跡(45)、鳥名タカドロ遺跡(23)からも土器が出土していることから、当時の集落は広範囲にわたって存在していたことが想定される。東谷田川、西谷田川に挟まれた台地上には、茨城県教育財団が調査した鳥名境松遺跡⁸⁾(38)、谷田部漆遺跡⁹⁾(39)、鳥名前野遺跡¹⁰⁾(3)、鳥名ツバタ遺跡¹¹⁾(19)があり、中期の竪穴住居跡や陥し穴が確認されている。これらは河川に臨む台地の縁辺部で、縄文時代中期から本格的な人々の生活が営まれるようになったと考えられる。

弥生時代の遺跡は、当地域では少ない。谷田部地区では、南関東系の遺物が出土した境松貝塚、下河原崎高山遺跡(5)などが確認されているのみである。

古墳時代の遺跡では、古墳として鳥名熊の山古墳群(18)、面野井古墳群(11)、鳥名関ノ台古墳群(10)、下河原崎古墳群(13)、谷田部台町古墳群(16)など数多く確認されている。しかし、大規模な古墳はなく、その大半が径7～25mの円墳である。集落跡としては、西谷田川と東谷田川に挟まれた台地上に多くみられる。当遺跡の他に鳥名前野遺跡(前期10軒、中期3軒)、鳥名ツバタ遺跡(中期48軒、後期9軒)、谷田部漆遺跡

(中期24軒)、鳥名熊の山遺跡¹¹⁾ (36)、鳥名八幡前遺跡¹²⁾ (22)があり、台地の縁辺部に位置している。

奈良・平安時代になると律令体制が整えられていく。当遺跡が位置する鳥名地区は旧谷田部町鳥名にあり、『和名類聚抄』にある『鳥名郡』に比定され、当時この地に中心地的集落が存在したことがうかがえる。

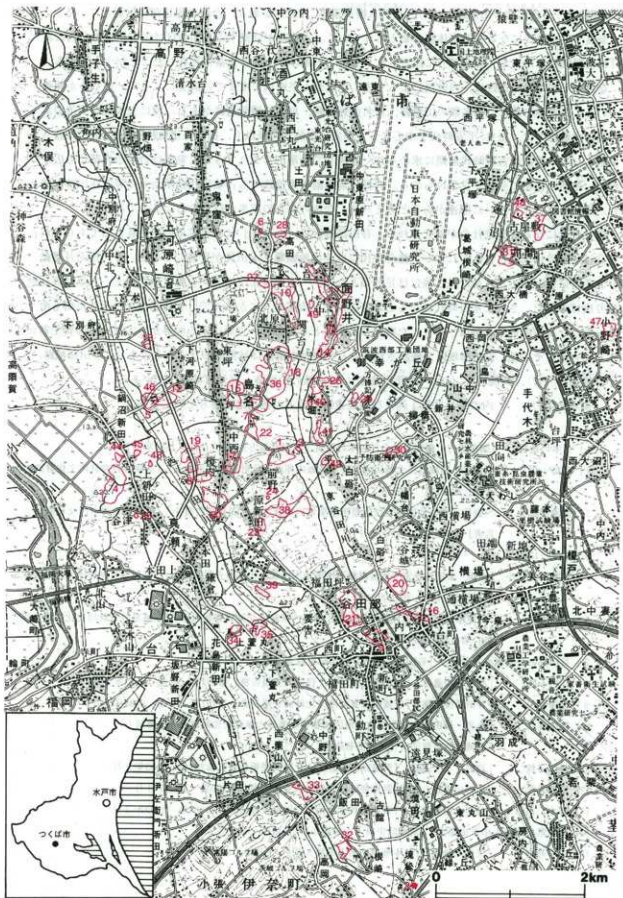
奈良・平安時代の遺跡は、当財団による平成7年度から平成14年度までの調査によって、いくつか報告されている。当遺跡の他に、鳥名熊の山遺跡、鳥名前野遺跡、鳥名八幡前遺跡がある。特に大規模な集落である鳥名熊の山遺跡では、奈良・平安時代を中心にして堅穴住居跡1500軒以上、掘立柱建物跡170棟以上が確認された。集落としての起源は古墳時代前期に求められ、継続して集落が営まれてきた。集落は台地の内部にも広がりをみせ、生活の様相に変化が見受けられる。同様に鳥名前野東遺跡でも古墳時代前期からの堅穴住居跡が確認され、周辺集落として互いに関連があると考えられ、今後の調査の成果が待たれるところである。

鎌倉時代になると武家社会が確立される。谷田部地区は『吾妻鏡』に八条院領の田中荘としてあらわれる。荘立は平安時代末期と考えられるが、鎌倉時代には荘の地頭職を小田氏が世襲していた。その後幕府騒動により北条得宗領となるが、幕府滅亡後には足利領となる。¹³⁾ その後は南北朝の動乱期を迎え、各地で攻防戦が繰り返された。さらに室町時代になると幕府の対応と内部対立からんで、常陸諸勢力の相互侵略も激しくなった。¹⁴⁾ 鳥名前野東遺跡は、そうした時期の居館跡と考えられ、方形に巡る堀跡から大量の土師質土器が出土している。その他、谷田部地区で確認されている中近世の遺跡は城館跡がほとんどであり、谷田部城跡 (9)、小野崎館跡 (47)、両河城跡 (48)、面野井城跡 (49)、熊の山城跡、高須貫城跡などがある。

※本文中の〈 〉内の番号は第1図及び周辺遺跡一覧表の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質 「関東地方」編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 成島一也 「(仮称)葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第121集 1997年3月
- 3) 渡邊幸雄 「(仮称)笠丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第119集 1997年3月
- 4) 註3)と同じ
- 5) 高野節夫ほか 「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第170集 2001年3月
- 6) 久野俊彦 「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第41集 1987年3月
- 7) 谷田部の歴史編さん委員会『谷田部の歴史』谷田部町教育委員会 1975年9月
- 8) 寺門千勝 「鳥名塚長遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第191集 (中巻) 2002年3月
- 9) 梅澤貴司 「谷田部漆遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第191集 (下巻) 2002年3月
- 10) 福田義弘 「鳥名・福田坪・体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第175集 2001年3月
- 11) 菅川 修 「鳥名ツバタ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第203集 2003年3月
- 12) 福田義弘 「熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第190集 2002年3月
- 13) 青木仁昌ほか 「鳥名八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第201集 2003年3月
- 14) 茨城県史編さん中世部会『茨城県史料・中世編Ⅰ』茨城県 1987年5月
- 15) 下中邦彦 「茨城の地名」『日本歴史地名大系第8巻』平凡社 1982年11月



第1図 高名前野東遺跡周辺遺跡位置図

表1 島名前野東遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	遺 跡 名	時 代						
		旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世			近 世	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世
1	島名前野東遺跡	○		○	○	○	○	26	水堀下遺跡				○	○		
2	境松貝塚	○	○	○			○	27	島名関ノ台遺跡				○			
3	島名前野遺跡	○		○	○	○	○	28	高田遺跡				○	○		
4	真瀬山田遺跡	○						29	水堀遺跡				○			
5	下河原崎高山遺跡			○	○			30	柳橋遺跡				○	○		
6	高田和田台遺跡				○	○		31	苅間神田遺跡	○	○	○	○	○	○	○
7	島名栗師遺跡				○			32	根崎遺跡	○	○		○	○	○	
8	島名榎内遺跡				○			33	西栗山遺跡	○	○		○			
9	谷田部城跡						○	○	34	真瀬三度山遺跡	○		○			○
10	島名関ノ台古墳群				○				35	上葎丸古屋敷遺跡	○		○		○	○
11	面野井古墳群				○				36	島名熊の山遺跡	○		○	○	○	○
12	下河原崎高山古墳群				○				37	苅間六十日遺跡				○	○	○
13	下河原崎古墳群				○				38	島名境松遺跡	○		○			
14	面野井南遺跡				○	○	○	○	39	谷田部漆遺跡	○		○	○		
15	島名本田遺跡				○	○	○	○	40	水堀屋敷添遺跡	○		○			
16	谷田部台町古墳群				○				41	水堀遺後前遺跡	○		○	○		
17	島名榎内古墳群				○				42	平後遺跡				○		○
18	島名熊の山古墳群				○				43	真瀬堀附北遺跡				○		
19	島名ツバタ遺跡	○		○					44	真瀬山田北遺跡	○		○			
20	谷田部台成井遺跡	○							45	鍋沼新田長峰遺跡	○		○			
21	谷田部福田前遺跡	○		○	○				46	下河原崎高山遺跡				○	○	
22	島名八幡前遺跡				○	○	○		47	小野崎館跡						○
23	島名タカド口遺跡	○		○					48	苅間城跡						○
24	島名一町田遺跡	○							49	面野井城跡						○
25	真瀬新田谷津遺跡	○							50	島名榎内南遺跡	○			○	○	

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

当遺跡は、平成11～13年にかけて既に調査され、古墳時代、奈良時代を中心とする集落跡と、中世の堀跡及び掘立柱建物跡が確認されている。

今回の調査では2,680㎡が調査され、古墳時代、奈良・平安時代の集落跡と、方形に巡らせた一町の堀跡の全容がほぼ確認できた。確認された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡12軒、土坑3基、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒、土坑1基、中世の堀跡1条、掘立柱建物跡2棟、時期不明土坑61基、溝6条、道路跡1条、欄列跡1条である。

遺物の大部分は、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器（坏・高坏・甕・鉢・瓶・埴・埴）, 須恵器（坏・蓋・盤・甕）である。その他の遺物としては、土製品（勾玉・白玉・紡錘車・土玉・支脚）、石製品（紡錘車・白玉）、ガラス小玉などが出土している。中世の遺物としては土師質土器（かわらけ）と磁器片（白磁皿）が出土している。

第2節 基本層序

テストピットは西区のB3b6に設置した。テストピットの地表面の標高は18.9mで地表から2.0mほど掘り下げた。土層は11層に細分され、第1層は表土、第2～11層は関東ローム層に対比される。

第1層は黒褐色の腐植土層である。ローム粒子をわずかに含み、粘性・しまりはともに弱い。層厚は20cmほどである。

第2層は暗褐色のソフトローム層である。粘性・しまりともに弱い。層厚は6～21cmほどである。

第3層は明褐色のソフトローム層である。粘性は弱く、しまりは普通である。層厚は12cmほどである。

第4層は明褐色のソフトローム層である。粘性は弱く、しまりは強い。層厚は12～40cmほどである。

第5層は褐色のソフトローム層である。粘性は弱く、しまりは普通である。層厚は24cmほどである。

第6層は褐色のソフトローム層である。粘性・しまりともに弱い。層厚は10cmほどである。

第7層は褐色のソフトローム層である。粘性・しまりともに普通である。層厚は22cmほどである。

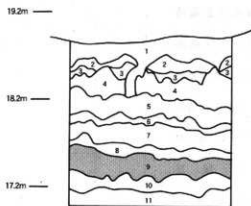
第8層は褐色のハードローム層である。粘性は普通、しまりは強い。層厚は12cmほどである。

第9層は暗褐色のハードローム層である。粘性・しまりはともに普通である。第II黒色帯に相当すると思われる。層厚は24cmほどである。

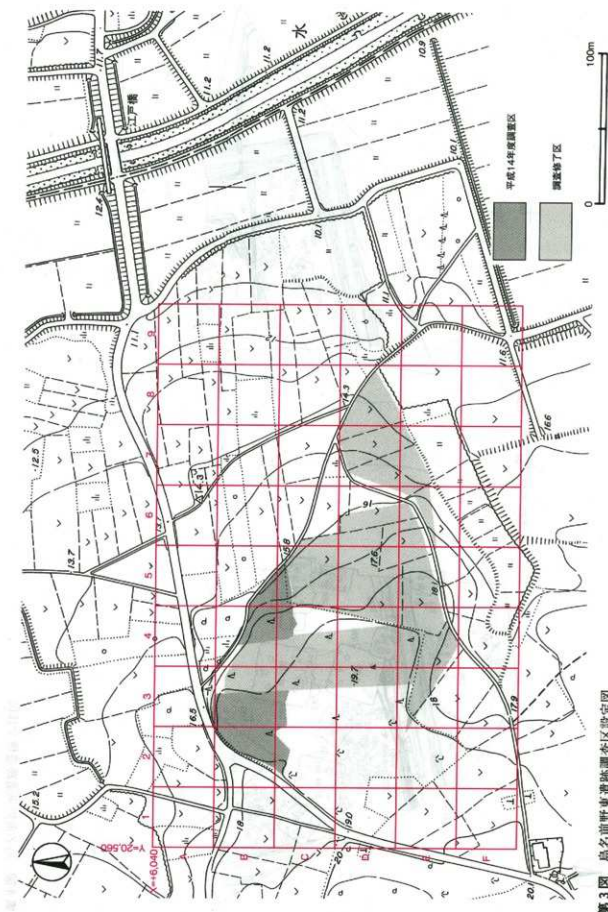
第10層は褐色のハードローム層である。粘性は普通、しまりは強い。層厚は18cmほどである。

第11層は褐色のハードローム層である。粘性・しまりともに普通である。層厚は24cmほどである。

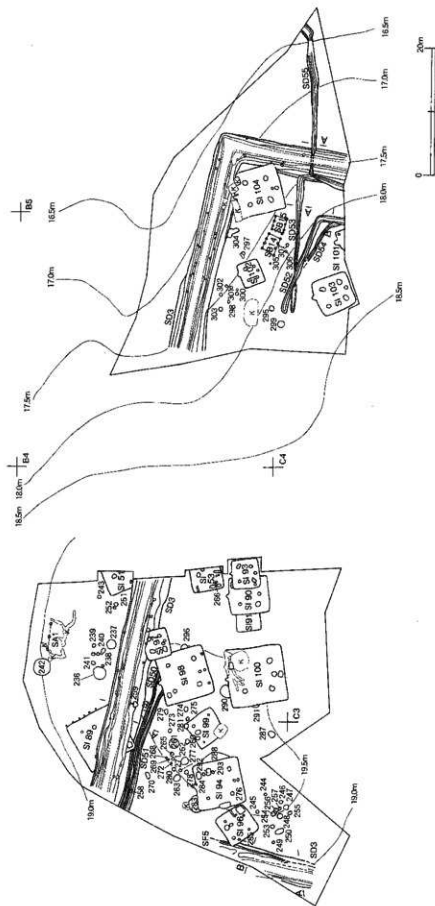
遺構は第3層の上面で確認した。



第2図 基本土層図



第3図 鳥名前野東遺跡調査区設定図



第4図 烏名郡野東遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡6軒、土坑3基、古墳時代後期の竪穴住居跡6軒を確認した。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

(1) 中期

① 竪穴住居跡

第51号住居跡（第5・6図）

位置 調査区西部のB3d6区に位置し、平坦な台地の縁辺部に立地している。

重複関係 南東側を第54号住居に、さらに南側を第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東西軸は5.6m、南北軸は5.2mだけ確認されている。主軸方向はN-24°-Wで、方形または長方形と推定される。壁高は22~40cmで、壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、全体的に締まりがある。壁溝は掘り込まれた南部と南東の一部を除き巡っている。床は貼床である。掘り方は、コーナー部を20cmほど掘り下げ、ローム土を埋めて貼床としている。

炉 中央部の北寄りに位置している。長径80cm、短径56cmの楕円形で、床面上を加床とし、被熱で赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|--------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 2 暗赤褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック少量 |
|--------|-------------------------|--------|--------------------|

ピット P1・P2及びP4は主柱穴に相当し、深さは15~30cmほどである。P3は深さ15cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は北壁際付近に付設され、長径64cm、短径50cmの楕円形で深さは56cmである。底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は南東コーナーに付設され、直径52cmの円形を呈し、深さは50cmである。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

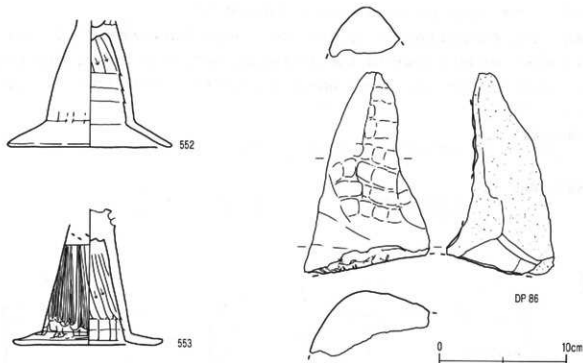
覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状態を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片188点（坏39、高坏32、甕117）、支脚1点が出土している。床全体から梁や垂木に使用されたと考えられる丸材や角材の炭化材が多量に出土している。遺物は、住居北側の中央部に位置する炉周辺から集中して出土している。549・550・553・DP86は、北壁際床面、511は炉内から出土している。552は南側の床面からの出土である。

所見 床面には炭化材が広範囲に見られ、遺物の出土数も少ないことから、住居廃絶に伴う焼失住居と考えられる。遺物は炉周辺に集中しており、土器片も高坏が多く見られる。その他、細片のため図示できないが、埴の体部片も床面から出土しており、住居廃絶時に祭祀的な行為が行われた可能性も考えられる。DP86には女性若しくは子供の手と思われる指痕が残っており、当時の生活形態を知る資料として興味が持たれる。時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第6図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表 (第5・6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
549	土師器	高坏	-	(14.0)	11.9	長石・石英・雲母・礫	明赤褐	普通	坏部外面へう削り、内面へう磨き、脚部内・外面へう削り、裾部横ナデ	北壁際床面	50%
550	土師器	高坏	-	(12.9)	[11.6]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	坏部外面へう削り、内面割離、脚部外面へう削り、内面へう削り、輪轆み痕	北壁際床面	50%
551	土師器	高坏	-	(9.8)	13.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部内面へう磨き、脚部外面へう削り、内面へう削り、輪轆み痕	炉内	60%
552	土師器	高坏	-	(10.1)	12.7	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部縦横ナデ、内面へう削り、輪轆み痕	南壁床面	40%
553	土師器	高坏	-	(10.8)	11.8	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	脚部外面へう削り後へうナデ、へう磨き、内面へう削り、へうナデ	北壁際床面	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP86	支脚	(16.0)	(10.0)	(4.5)	(379)	長石・石英	ナデ、指頭痕	北壁際床面	

第53号住居跡 (第7・8図)

位置 調査区西部のB3g6区に位置し、台地北部の緩斜面に立地している。

規模と形状 南北軸4.6m、東西軸は3.6mだけ確認され、主軸方向はN-10°-Wで、方形または長方形と推定される。壁高は25~40cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 は平坦で、やや締まりがある。壁溝は、確認部分では巡っている。間仕切り溝が西壁に1条、南壁に1条確認されている。長さ85~100cm、幅25~30cm、深さ10~15cmで、いずれも壁際から中央に向かって延びている。

ピット 4か所。P1は深さ29cm、P2は深さ26cmで住居中央に向かって並んでいることから、出入り口施設

に伴うピットと考えられる。P3・P4は深さ19cmで、性格は不明である。

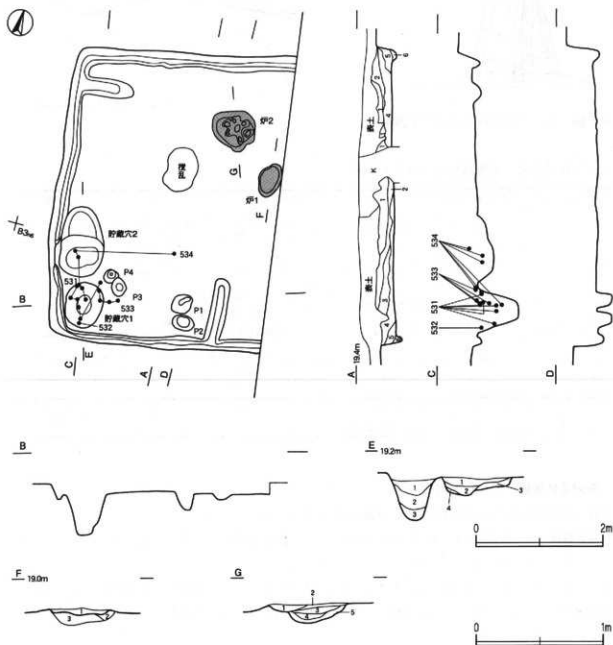
貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南西コーナー部に位置している。長径70cm、短径60cmの楕円形である。底面までの深さは67cmで、皿状を呈す。貯蔵穴2は、貯蔵穴1の北側に並んで位置している。長軸110cm、短軸70cmの不定形で、階段状に掘り込まれており、15~20cmの段と20~30cmの段がある。壁はどちらも外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴1土層解説

- | | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1 灰黄褐色 ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 2 暗褐色 ロームブロック中量 |
| | 3 黒褐色 ロームブロック中量 |

貯蔵穴2土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 4 褐色 ロームブロック多量 |



第7図 第53号住居跡実測図

炉 2か所。炉1は住居東側のやや北寄りに位置している。長径55cm、短径35cmの楕円形で、床面を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉2は炉1よりさらに北側に位置し、北壁際近くに位置している。長径は68cm、短径64cmの円形で、12cmほど掘りくぼめた地床炉である。どちらも炉床は被熱で赤変硬化している。炉の位置と炉床面の赤変硬化具合から、炉2が主として使われていたと考えられる。

炉1土層解説

- | | |
|--------------------------------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック・ロームブロック少量 | |

炉2土層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量 | |

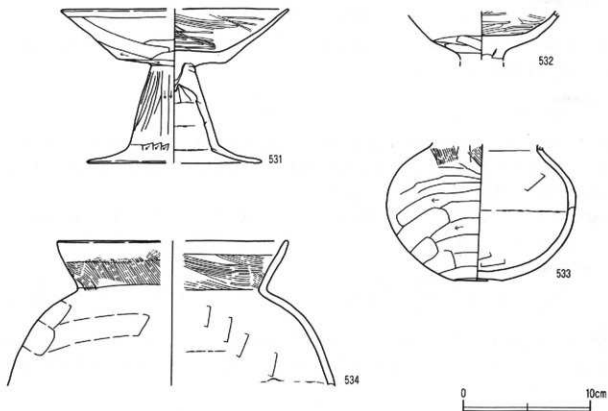
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状態を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1 黒色 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 4 極暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 6 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片321点(坏38、高坏6、増1、甕276)が出土している。531～534はいずれも住居南西コーナー部の貯蔵穴1から、細片の状態で出土した土器片が接合したものである。532・533は貯蔵穴1の覆土上層から、531・534は貯蔵穴1の覆土上層から中層で出土している。531の坏部は正位の状態で出土しており、534の一部は貯蔵穴2の覆土上層や南西部の床面からも出土している。

所見 南西部の床面には、一部焼土の広がりが見られる。覆土中に焼土は検出されなかったことから、住居廃絶に伴う焼失後、自然に埋没したと判断できる。時期は出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第8図 第53号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
331	土師器	高坏	[17.8]	12.2	[13.6]	長石・石英・雲母	明褐色	普通	坏部外面ヘラナデ、脚部外面ヘラ削り後ナデ、内面ヘラ削り、輪積み痕	貯蔵穴1内	70%、PL.9
332	土師器	高坏	-	(3.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き	貯蔵穴1内	20%
333	土師器	埴	-	(10.7)	3.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、頸部ハケ目調整、内面ヘラナデ、ハケ目調整痕、輪積み痕	貯蔵穴1内	70%
334	土師器	甕	[18.0]	(11.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部内・外面ハケ目調整、体部内・外部ヘラナデ、輪積み痕	貯蔵穴2内	15%

第89号住居跡（第9・10図）

位置 調査区西部のB2c0区に位置し、台地縁辺部の緩斜面に立地している。

重複関係 中央部を第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.1m、短軸8.0mの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は25~28cmほどで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 第3号溝に掘り込まれているため全面は確認できないが、ほぼ平坦であり、壁溝が全周している。硬化面は見られない。

焼土塊 床面の数カ所で焼土塊が検出されている。焼土塊は、垂木に使用されたと思われる炭化材の下から被熱を受けて赤変した状態で検出されている。厚さは15cmほどで、屋根部に盛られた土が落ちて焼けたものと考えられる。

焼土塊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック、炭化物少量 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化材少量

炉 北東部に位置している。長径66cm、短径56cmの楕円形で、炉床面の掘り込みはなく、床面上を炉床としており、被熱で赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量 2 褐色 ローム粒子多量

ピット 9か所。P1~P3は配列から主柱穴に相当し、P1の深さは81cm、P3の深さは82cmである。P2は第3号溝に掘り込まれているため、わずかに柱穴が確認されただけである。北東の壁外に並ぶP4~P9は位置的に住居の上屋構造の構築に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー部に位置している。長軸88cm、短軸84cmの隅丸方形で、深さ62cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

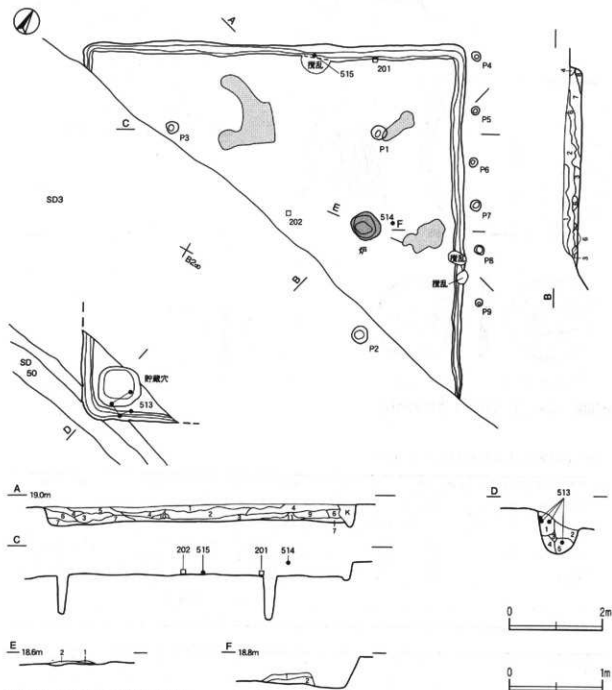
- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

覆土 11層に分層される。覆土上層部は焼土やローム土が少ない黒色土で、土器片が多く出土している。下層部には焼土やロームブロックを多く含む層がある。炭化材も検出されるなど不自然な堆積状態を示した人為堆積と考えられる。

土層解説

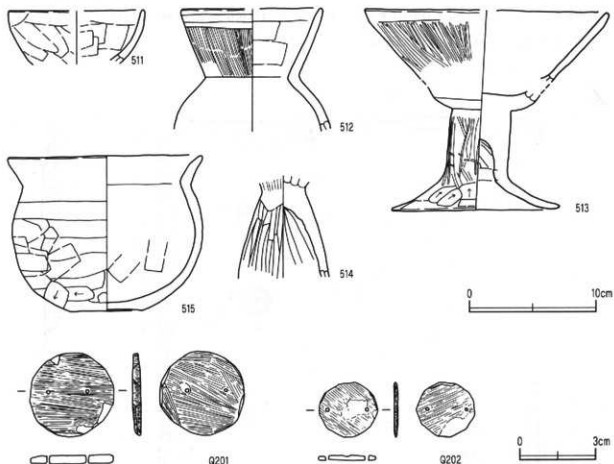
1 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
3 極暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	9 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	10 極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	11 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師器片233点（坏38、高坏5、埴9、甕181）、石製模造品2点（双孔円板2）が出土している。その他、弥生土器片1点が混入している。床面全体から焼土が確認され、炭化材が壁際から中央に向かって横位の状態で出土している。515・Q201は北壁際の床面、Q202は住居中央部の床面、513は貯蔵穴の覆土下層、514は北東部上層からそれぞれ出土している。



第9図 第89号住居跡実測図

所見 本跡は床面から焼土が確認され、炭化材が壁際より中央に向かって検出されており、焼土住居と判断できる。覆土を見ると大きく上層と下層に分けることができ、上層は、焼土やロームブロックをあまり含まない黒色土、下層はロームブロックや焼土、炭化材を多く含む層である。両層から土器片が出土しているが、時期差がみられる。上層は後世に投棄されたものと思われる。時期は、覆土下層及び貯蔵穴内からの出土土器から判断して、5世紀後葉と考えられる。



第10図 第89号住居跡出土遺物実測図

第89号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
511	土器	碗	[10.6]	(4.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ、体部内外面ヘラナデ	覆土中	30%
512	土器	罎	[11.0]	(9.7)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整、内面ヘラナデ	覆土中	25%
513	土器	高坏	[19.2]	[15.5]	13.2	石英・長石・雲母・赤色粒子・礫	橙	普通	坏部外面ヘラ磨き、内面ナデ、脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り、輪轆み痕	貯蔵穴内	80%
514	土器	高坏	-	(8.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	脚部外面ヘラナデ、内面ヘラ削り	北東部上層	15%
515	土器	小形甕	15.2	12.3	5.6	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、体部内面ヘラナデ	北壁際床面	80%, PL.9

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q201	双孔円板	3.3	0.3	0.1	6.4	滑石	両面平坦。表面横位・表面斜位の研磨	北壁階下層	PL.14
Q202	双孔円板	2.3	0.2	0.1	1.4	滑石	両面平坦。斜位の研磨	中央部床面	PL.14

第91号住居跡 (第11・12図)

位置 調査区西部のB3i4区に位置し、台地北部の平坦地に立地している。

重複関係 東側を第90号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸3.8m、東西軸は2.7mだけ確認されている。主軸方向はN-8°-Wで、方形または長方形と推定される。壁高は16~20cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、やや締まりがある。

ピット 確認できなかった。

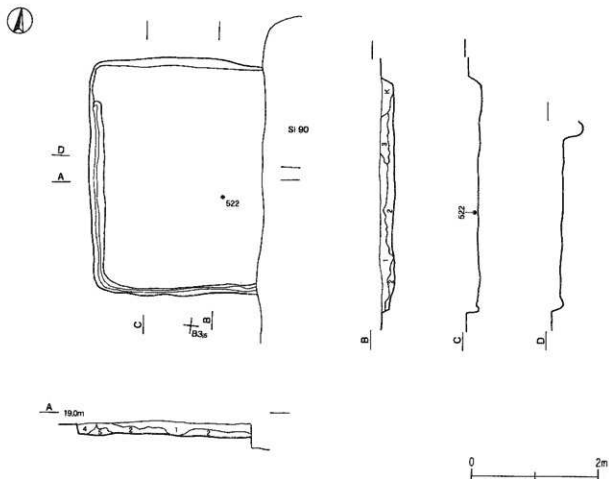
覆土 5層に分層される。ロームブロックを多く含み、不自然な堆積状態を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量 | 4 棕褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量 | 5 褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片62点(坏8, 碗1, 埴1, 甕52), 須恵器片5点が散在して出土している。遺物のほとんどが覆土上層から出土している。522は中央の床面に近い覆土中から出土している。

所見 本跡の遺物はほとんどが細片である。出土位置も南側にまとまっており、住居廃絶時に投棄したものと考えられる。時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第11図 第91号住居跡実測図



第12図 第91号住居跡出土遺物実測図

第91号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
522	土師器	碗	[13.4]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面へツ削り, 内面ナデ	中央部下層	5%
523	土師器	埴	[8.6]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ, 外面へツ磨き痕	覆土中	5%
524	土師器	羹	[15.5]	(2.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ後ハケ目調整	覆土中	5%

第96号住居跡 (第13・14図)

位置 調査区西部のB 2 16区に位置し, 台地北西部の平坦地に立地している。

重複関係 北西コーナー部を第3号溝, 北西部を第285号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.1m, 短軸は5.0mの方形で, 主軸方向はN-37°-Wである。壁高は22~66cmで, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で, 出入り口部と貯蔵穴付近から炉にかけて縦長によく踏み固められている。壁溝が全周しており, 北東壁からは, 長さ100cm, 幅15cm, 深さ15cmほどの間仕切り溝が1条確認され, 中央に向かって延びている。

炉 2か所。炉1は中央部からやや北に位置している。長径72cm, 短径46cmの楕円形で, 床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉2は炉1のさらに北西側に並列して位置している。長径86cm, 短径80cmの円形で, 床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉1・2の炉床面は被熱で赤変硬化しており, よく使われている。床の硬化状況からは炉1が主として使われたと考えられる。

炉土層解説 (炉1・2共通)

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子少量

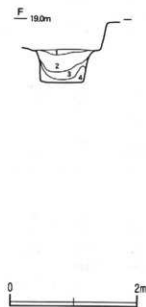
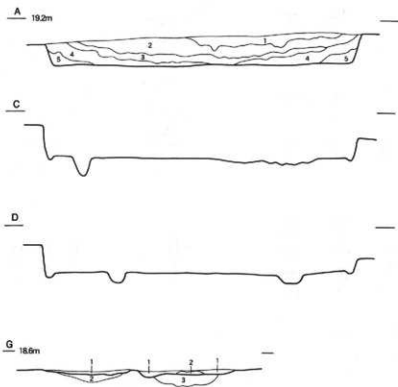
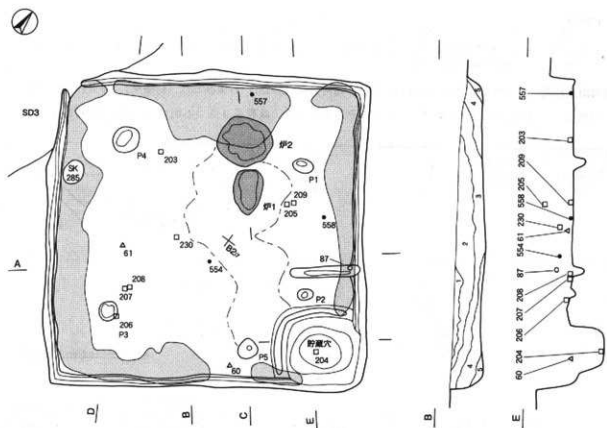
ピット 5か所。P1~P4は配列から主柱穴に相当し, 深さ8cm~20cmである。P5は深さ30cmで, 南東コーナーの貯蔵穴寄りに位置しており, 床の硬化状況から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸100cm, 短軸76cmの不整形で, 深さ56cmである。底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴を囲むようにして, ローム土を固めた高まりが巡っている。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子量

覆土 5層に分層される。第3層~第5層はレンズ状に堆積した自然堆積であるが, 第1・2層は中央部に集中して遺物が出土しており, ロームブロックも含まれることから, 投げ込みによる人為堆積と考えられる。

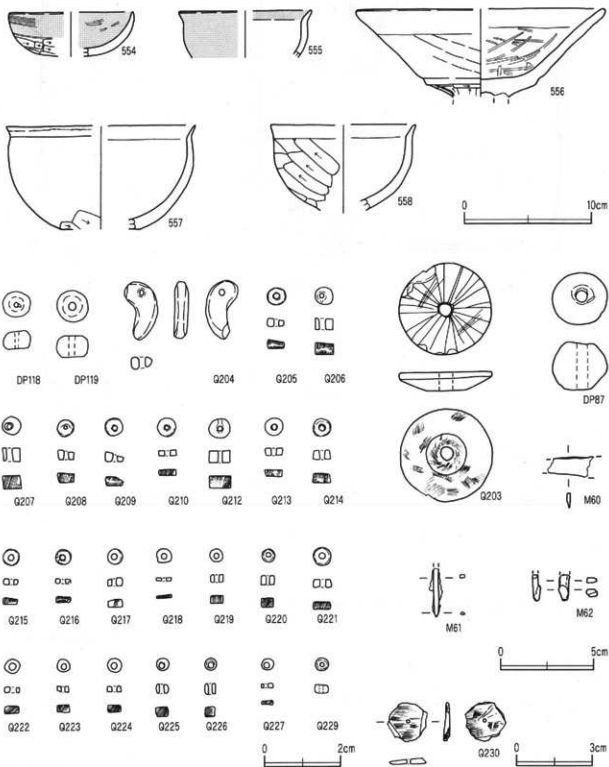


第13図 第96号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片1233点(坏184, 碗3, 高坏123, 甕923), 石製品25点(紡錘車1, 勾玉1, 白玉22, 有孔円板1), 土製品3点(土玉1, 白玉2), ガラス小玉1点, 鉄製品3点(不明), 炭化米, 種子7点(桃6,



第14図 第96号住居跡出土遺物実測図

不明1)が出土している。その他、縄文土器片1点が出土している。覆土上層から出土した遺物は中央部に集中しており、覆土下層部から出土した遺物とは時期差がある。また、各壁際からは焼土が検出されている。556は覆土中から、557は北壁際の床面から、554は中央部の覆土中層からそれぞれ破片の状態で出土している。炭化米、白玉の大半は第3層以下の覆土を水洗選別して検出したものである。

所見 中央の覆土上層から多くの土器片がまとめて出土しているが、下層から出土した遺物とは時期差があるため、住居廃絶後自然に埋没した後の窪地に、後世になって一括投棄したものと考えられる。覆土下層の各壁際から焼土が確認され、出土した土器片もほとんどが細片であることから、住居廃絶時に破棄して処分したのと考えられる。時期は、覆土下層からの出土土器から判断して、5世紀後葉と考えられる。

第96号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
554	土師器	坏	[9.8]	(3.5)	-	石英・雲母	赤褐	普通	外面口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ削り、内面ヘラ磨き	中央部中層	5%
555	土師器	椀	[10.4]	(3.7)	-	石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ナデ	覆土中	5%
556	土師器	高坏	[19.6]	(7.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラナデ、内面ヘラ磨き	覆土中	15%
557	土師器	椀	[15.0]	(8.2)	-	長石・石英・雲母・燧	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面ナデ、底部ヘラ削り、内面ナデ	北壁部床面	30%
558	土師器	椀	[11.0]	(6.8)	-	石英・雲母・燧	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	北壁部床面	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP87	上玉	2.9	2.5	0.6	18.50	長石・赤色粒子	ナデ、片面穿孔	東壁部中層	PL14
DP118	白玉	0.8	0.5	0.1	0.21	長石	側面太鼓状・ナデ	覆土下層	
DP119	白玉	0.8	0.6	0.2	0.38	雲母	側面太鼓状・ナデ	覆土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q203	粘雑草	4.9	1.0	0.7	(31.70)	滑石	円錐台形、上面先刺、下面多方向の研磨	北西部床面	98%、PL14
Q205	白玉	0.5	0.2	0.2	0.07	滑石	側面やや太鼓状、片面穿孔	北東部上層	PL14
Q206	白玉	0.5	0.3	0.1	0.12	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部床面	PL14
Q207	白玉	0.5	0.4	0.2	0.13	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部床面	PL14
Q208	白玉	0.4	0.3	0.1	0.08	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部床面	PL14
Q209	白玉	0.5	0.3	0.2	0.08	滑石	側面太鼓状、片面穿孔	北東部床面	PL14
Q210	白玉	0.5	0.2	0.1	0.08	滑石	側面円筒状、片面穿孔	覆土中	PL14
Q212	白玉	0.5	0.3	0.2	0.16	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q213	白玉	0.5	0.2	0.1	0.08	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q214	白玉	0.5	0.2	0.1	0.10	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q215	白玉	0.4	0.2	0.2	0.06	滑石	側面太鼓状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q216	白玉	0.4	0.2	0.1	(0.04)	滑石	側面やや太鼓状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q217	白玉	0.4	0.2	0.1	0.05	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q218	白玉	0.4	0.1	0.1	0.02	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q219	白玉	0.3	0.2	0.1	0.04	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q220	白玉	0.3	0.3	0.1	0.04	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q221	白玉	0.5	0.2	0.2	0.07	滑石	側面やや太鼓状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q222	白玉	0.4	0.1	0.2	0.04	滑石	側面太鼓状、片面穿孔	南部覆土中	PL14

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q223	白玉	0.4	0.2	0.1	0.04	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q224	白玉	0.4	0.2	0.1	0.03	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q225	白玉	0.3	0.3	0.1	0.05	滑石	側面やや円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q226	白玉	0.3	0.3	0.2	0.05	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q227	白玉	0.3	0.2	0.1	0.02	滑石	側面円筒状、片面穿孔	南部覆土中	PL14
Q229	小灰	0.4	0.2	0.1	0.08	ガラス	ブルー、側面やや円筒状	北部覆土中	PL14
Q230	有孔円板	(1.5)	0.2	0.1	(0.69)	滑石	両面横位の研磨	中央部中層	PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q204	勾玉	1.5	0.8	0.4	0.6	滑石	孔徑1.2、全面丁寧な研磨	貯蔵穴内	PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M60	刀子 <small>ホ</small>	(2.4)	(1.0)	(0.3)	(1.28)	鉄	刃部の破片 <small>ホ</small>	南東部床面	
M61	不明	(2.6)	(0.4)	(0.2)	(0.34)	鉄	棒状の破片、鉄線部の一部 <small>ホ</small>	南部下層	
M62	不明	(1.4)	(0.5)	(0.4)	(0.50)	鉄	断面方形の棒状、鉄線部の一部 <small>ホ</small>	東部覆土中	

第99号住居跡 (第15図)

位置 調査区西部のB2g0区に位置し、台地北部の平坦地に立地している。

重複関係 北コーナー部を第281号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺4.8mほどの方形で、主軸方向はN-38°-Wである。壁高は18~27cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、やや締まりがある。壁溝は、ほほ巡っている。

炉 中央部からやや北西側に位置している。長径88cm、短径62cmの楕円形で、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は被熱で赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 2 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

ピット 4か所。P1~P3は配列から支柱穴に相当し、深さ19~53cmである。P4は径70cmほどの円形で、底部はやや皿状にくぼんでおり、深さは54cmである。性格は不明であるが、貯蔵穴の可能性も考えられる。

ピット4土層解説

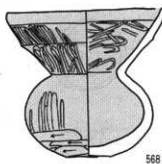
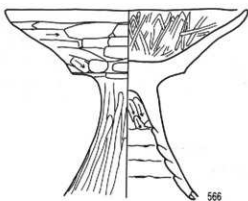
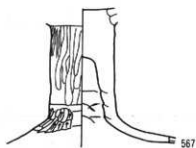
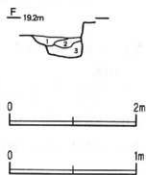
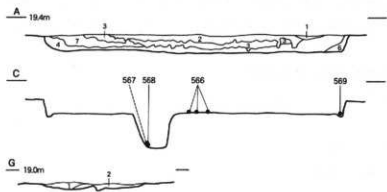
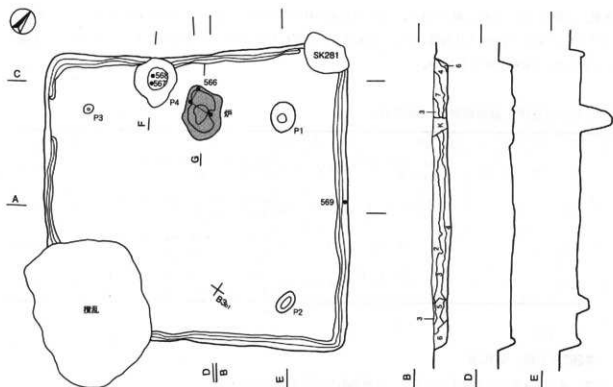
- 1 黒褐色 ロームブロック少量 3 暗褐色 ロームブロック中量
2 黒褐色 ロームブロック中量

覆土 7層に分層される。レンズ状に堆積しているが、ロームブロックを多く含む層があり、不自然な堆積状態を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック中量 6 暗褐色 ロームブロック中量
3 黒褐色 ロームブロック少量 7 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片220点(坏27, 高坏3, 埴9, 甕18, 甌1)が出土している。遺物の大半は覆土上層部からの出土である。覆土下層部から床面から出土した遺物は北西壁際に集中しており、住居廃絶時に投棄したものと考えられる。566は炉床から出土した破片を接合したものである。567・568はP4内の底部から横位の状態で出土している。



第15图 第99号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡からは、祭祀に用いられたと考えられる高坏や埴が出土している。568はP4の底部から完形のままだとされており、当時の生活習慣の中で、祭祀的な行為が行われていたことが想定される。時期は出土土器から判断して、5世紀中葉と考えられる。

第99号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
566	土師器	高坏	19.3	(15.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・糠	明赤褐色	普通	口縁部横ナデ、肩部外面へラ磨き、内面へラ削り、輪積み痕	跡塚	60%, PL10
567	土師器	高坏	-	(11.2)	-	石英・赤色粒子・糠	にぶい黄褐色	普通	肩部外面へラ磨き、内面輪積み痕、胴部横ナデ、外部内面へラ磨き痕	P4底部	45%
568	土師器	埴	12.3	11.8	3.4	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面へラ磨き輪積み痕、胴部へラ磨き、下部へラ削り、口縁部内面へラナデ	P4底部	98%, PL10
569	土師器	埴	5.8	6.6	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面へラ削り後横ナデ、内面へラナデ、外部外面へラ削り	東邊溝内	98%, PL10

② 土坑

第262号土坑（第16図）

位置 調査区西部のB2F9区に位置し、台地北部の平坦地に立地している。

規模と形状 長径1.2m、短径1.1mのやや楕円形で、長径方向はN-48°Wである。深さは40cmほどで、底面は平坦である。中央からずれた位置に楕円形の掘り込みがあり、深さは20cmほどである。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。不自然な堆積状態を示した人為堆積ある。

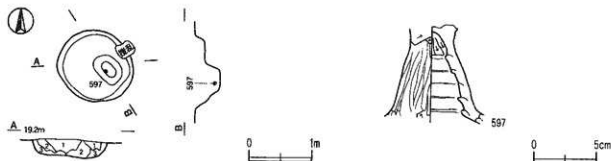
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

- 2 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 597が中央部下層から1点出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第16図 第262号土坑・出土遺物実測図

第262号土坑出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
597	土師器	高坏	-	(7.8)	-	長石・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	肩部外面へラ磨き、輪積み痕	中央部下層	40%

第283号土坑（第17図）

位置 調査区西部のB 2g7区に位置し、台地縁辺部の緩斜面に立地している。

重複関係 南側を第94号住居に掘り込まれている。

規模と形状 径2.7mほどの円形で、深さは80cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

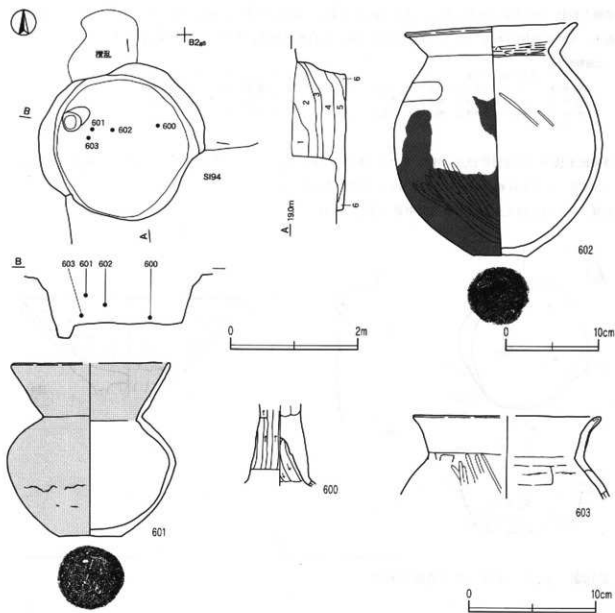
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状態を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片30点（坏3，埴3，甕24）が出土している。これらの遺物は覆土中層から下層にかけて出土している。601と602はそれぞれ覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第17図 第283号土坑・出土遺物実測図

第283号土坑出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	画	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
600	土師器	高坏	-	(6.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙		普通	脚部内・外面ヘラ削り	東部下層	15%
601	土師器	埴	[12.4]	13.8	4.8	長石・石英	にぶい	黒	普通	口縁部ナデ、体部外面ナデ、輪積み痕、底部一方向のヘラ削り	中央部中層	80%, PL.12
602	土師器	甕	17.4	24.5	5.5	長石・石英・礫	にぶい	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り後ナデ、下層ヘラ削り内面ヘラナデ、ヘラ磨き痕	中央部中層	98%, 外面塗付着, PL.12
603	土師器	甕	[15.0]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい	橙	普通	口縁部横ナデ、貼り合わせ、体部外面ヘラ削り後ナデ、ヘラ磨き内面ヘラナデ、輪積み痕	中央部中層	10%

第290号土坑 (第18図)

位置 調査区西部のB 3 h2区に位置し、台地北部の平坦地に立地している。

重複関係 南側を第100号住居に掘り込まれている。

規模と形状 径2.1mほどの円形で、深さは60cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 8層に分層される。ロームブロックを含み、不自然な堆積状態を示した人為堆積である。

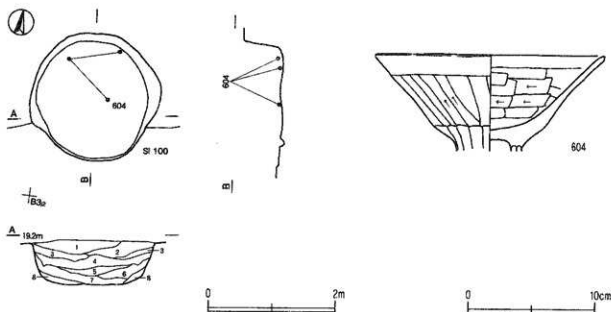
土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 濃い緑色 焼土ブロック中量 | 5 黒褐色 ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 6 暗褐色 ロームブロック多量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック中量 | 7 黒褐色 ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック微量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片13点(坏3, 高坏1, 甕9)が出土している。その他、縄文土器片1点が混入している。

604は覆土下層から底面でも出土した破片が、接合したものである。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第18図 第290号土坑・出土遺物実測図

第290号土坑出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
604	土師器	高坏	18.2	(7.7)	-	長石・石英・赤色粒子・塵	橙	普通	坏部口縁横ナデ、作部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	北→中央部下層	50%

(2) 後期

① 竪穴住居跡

第90号住居跡 (第19・20図)

位置 調査区西部のB315区に位置し、平坦な台地上に立地している。

重複関係 西壁側で第91号住居跡を掘り込み、東壁側で第93号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.0m、短軸5.8mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は28~44cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、出入り口付近から主柱穴の内側にかけて、よく踏み固められている。壁溝は第93号住居に掘り込まれた部分を除き通っている。

竪 北壁中央部に位置している。規模は、焚き口部から煙道部まで154cm、袖部幅106cmである。壁外への掘り込みは40cmほどである。火床部は床面を15cmほど凹状に掘りくぼめ、ローム土と砂質粘土を埋め戻して作っている。袖部は砂質粘土で構築されている。煙道部は火床面からほぼ平坦に掘り込まれた後、ローム土と砂質粘土によって構築され、外傾して立ち上がっている。

竪土層解説

1	にひ黄褐色	砂質粒子多量、粘土粒子中量、焼土粒子微量	7	にひ黄褐色	砂質粒子多量、焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子微量
2	暗赤褐色	砂質粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	8	にひ黄褐色	砂質粒子・粘土粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
3	暗赤褐色	焼土ブロック中量、砂質粒子・粘土粒子少量	9	黒褐色	ロームブロック・砂質粒子・粘土粒子少量
4	暗褐色	砂質粒子・粘土粒子中量、焼土ブロック少量	10	暗褐色	ローム粒子多量、砂質粒子・粘土粒子少量
5	灰褐色	砂質粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量	11	暗褐色	ローム粒子中量、砂質粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
6	灰褐色	砂質粒子・粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・少量			

ピット 5か所。P1~P4は深さ48~89cmで主柱穴である。P5は深さ57cmで南壁の中央に位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長軸100cm、短軸74cmの隅丸長方形で、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

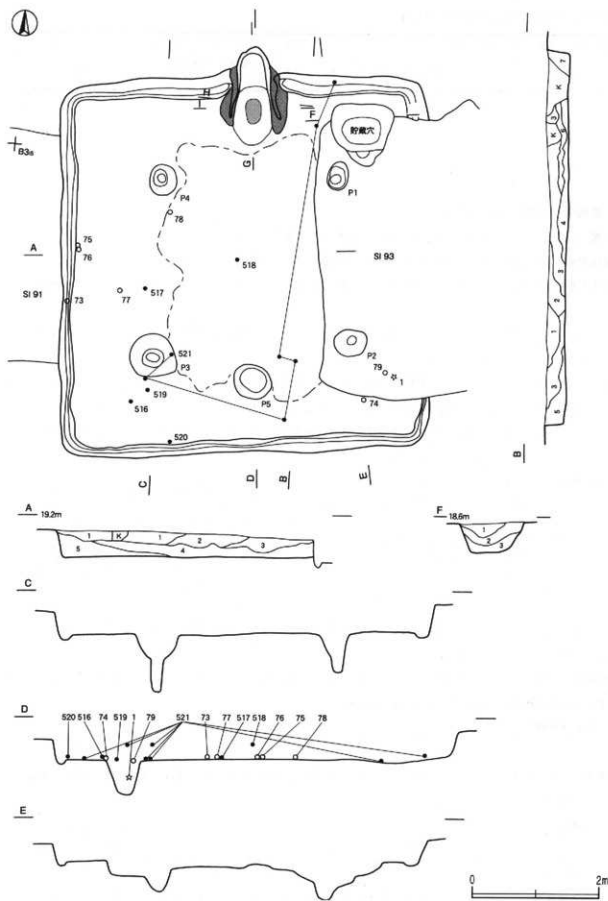
1	極暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂質粒子少量	2	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粒子微量
			3	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量

覆土 7層に分層される。全体にロームブロック及び焼土ブロックが多く含まれ、不自然な堆積状態を示した人為堆積である。

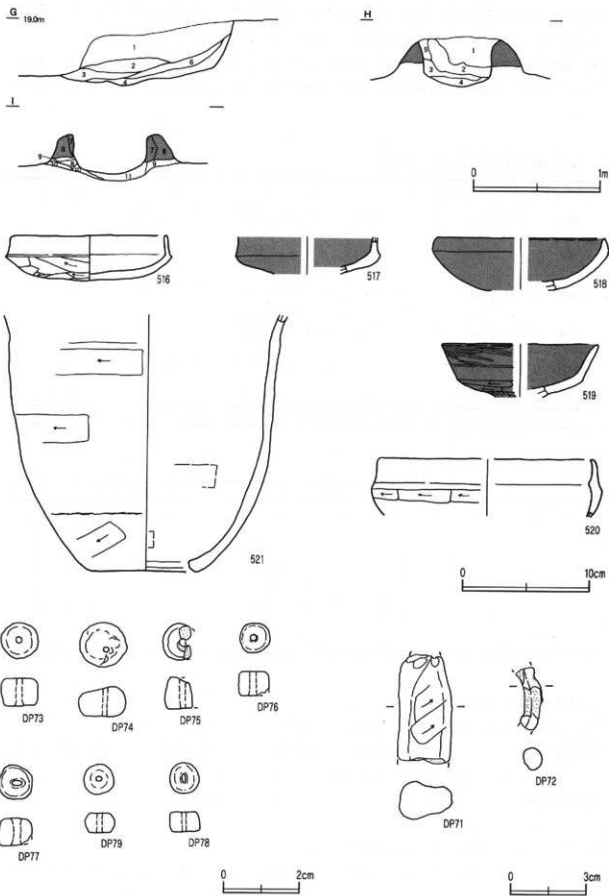
土層解説

1	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	5	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量	6	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗赤褐色	ロームブロック・砂質粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
4	暗褐色	ロームブロック中量、砂質粒子少量			

遺物出土状況 土師器片550点 (坏83, 高坏5, 輪1, 甕44, 甕17, 須恵器片9点 (甕), 土製品9点 (白玉7, 不明2), 種子1点 (不明) が出土している。516・519・520は南西コーナー部付近の覆土下層から床面, 517は



第19图 第90号住居跡实测图



第20図 第90号住居跡・出土遺物実測図

南西部床面, 518は中央部の覆土中層から出土している。521は南壁際から北壁際にかけての床面に, 広く散在した状態で出土した破片が接合したものである。その他, ナイフ形石器が混入している。

所見 遺物は南西部から中央部にかけて広く見られ, 521のように南壁際から北壁際の破片が接合している土器もあることから, 住居廃絶時に投棄されたものと判断できる。時期は, 出土土器から6世紀後半と考えられる。

第90号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
516	土師器	坏	123	3.5	-	長石・石英・雲母・塵	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	南西コーナー部	75%
517	土師器	坏	-	(29)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	南西部床面	15%
518	土師器	坏	[132]	(41)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ	中央部中層	15%
519	土師器	高坏	[122]	(42)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄砂	普通	口縁部外面横ナデ, 体部ヘラ削り後ヘラ磨き, 内面ヘラ磨き	南西コーナー部	20%
520	土師器	椀	[168]	(45)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ, 体部外面ヘラ削り, 内面ナデ	南西コーナー部	5%
521	土師器	瓶	-	(20.5)	8.4	石英・赤色粒子・塵	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 内面ヘラナデ	南〜北壁際	60%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP71	不明	4.3	2.2	1.4	15.5	長石・雲母・赤色粒子	ナデ, ヘラ削り痕	覆土中	PL14
DP72	不明	2.5	1.0	0.9	1.6	長石・雲母	ナデ	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP73	白玉	1.0	0.7	0.1	0.78	長石・雲母	側面内筒状・ナデ	西壁際床面	PL13
DP74	白玉	1.2	0.8	0.1	1.08	長石・雲母	側面太鼓状・ナデ	南西コーナー部	PL13
DP75	白玉	1.0	0.8	[0.2]	0.50	長石・雲母・赤色粒子	側面やや太鼓状・ナデ	西壁際床面	50%
DP76	白玉	0.8	0.7	0.2	0.44	雲母・赤色粒子	側面円筒状・ナデ	西壁際床面	PL13
DP77	白玉	0.9	0.7	0.2	0.66	雲母・赤色粒子	側面円筒状・ナデ	南西部床面	PL13
DP78	白玉	0.8	0.5	0.2	0.34	長石	側面円筒状・ナデ	北西部床面	PL13
DP79	白玉	0.8	0.5	0.1	0.37	雲母	側面太鼓状・ナデ	南西コーナー部	PL13

第94号住居跡 (第21~23図)

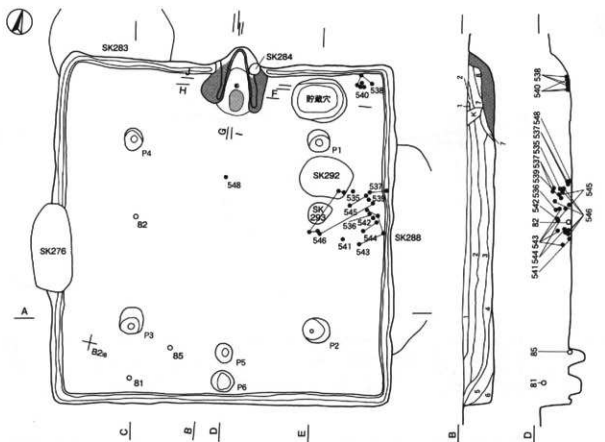
位置 調査区西部のB2h8区に位置し, 台地縁辺部の平坦地に立地している。

重複関係 北西のコーナー部が第283号土坑を, 東壁で第288号土坑をそれぞれ掘り込み, 西壁を第276号土坑に, 東部を第284号土坑に, 東部を第292・293号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

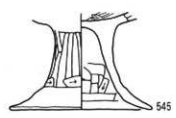
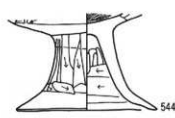
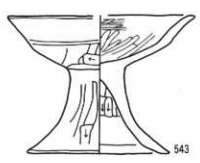
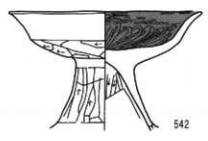
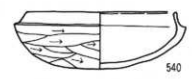
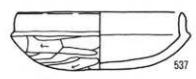
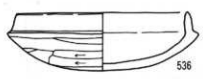
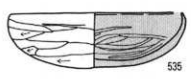
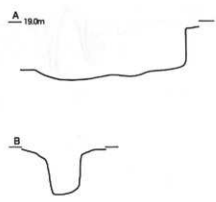
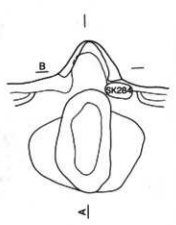
規模と形状 長軸7.3m, 短軸は7.2mの方形で, 主軸方向はN-10°-Wである。壁高は46~61cmで, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, やや締まりがある。壁溝が全周している。

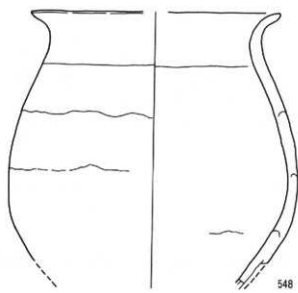
竈 北壁中央部に位置している。規模は, 焚き口から煙道部まで146cmで, 袖部幅132cmである。壁外への掘り込みは38cmほどである。火床部は床面を5~9cm皿状に掘りくぼめ, ローム土と砂質粘土を埋め戻して作っている。袖部は砂質粘土で構築している。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がっている。土製の支脚が火床部中



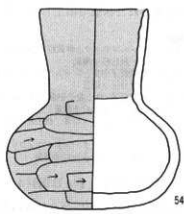
第21图 第94号住居跡実測图



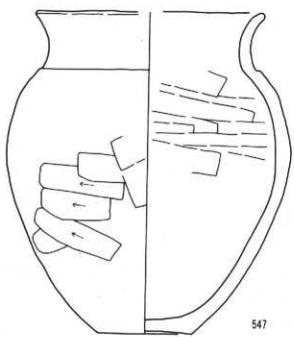
第22图 第94号住居跡・出土遺物実測図



548



546



547



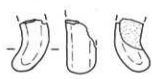
DP82



DP84



DP85



DP83



DP81



第23图 第94号住居跡出土遺物実測図

尖から掘え置かれた状態で出土している。

覆土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------------------|----------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・砂質粘土・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 濃い黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子中量、砂質粘土少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 砂質粘土中量、ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック中量、砂質粘土少量 |
| 3 濃い黄褐色 | 砂質粘土・粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量、砂質粘土微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土・粘土粒子少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 5 濃い黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、砂質粘土・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 10 濃い黄褐色 | 焼土粒子・砂質粘土・粘土粒子中量、ローム粒子少量 |
| | | 11 灰黄褐色 | 粘土粒子多量、砂質粘土中量、ローム粒子少量 |
| | | 12 濃い黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、砂質粘土少量、焼土ブロック微量 |
| | | 13 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量 |

ピット 6か所。P1～P4は配列から主柱穴に相当し、深さは51～78cmである。P5の深さは34cm、P6の深さは23cmで、竈と向かい合う位置にあり、中央に向かって並んでいることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー寄りに位置している。長径114cm、短径92cmの隅丸長方形で、深さ26cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | | |

覆土 8層に分層される。レンズ状の堆積状態を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | 砂質粘土中量、ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 8 暗褐色 | 砂質粘土・粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片2178点（坏767、高坏22、甕1388、甌1）、土製品5点（白玉1、紡錘車1、勾玉1、不明2）、種子1点（不明）が出土している。その他、縄文土器片1点、須恵器片40点、土師質土器片13点が出土している。土師器は特に東壁際の中央部に集中している。536・537・539・541～546は東壁際付近から出土した土器片が接合したもので、覆土上層から中央部の床面に向かって流されたような状態で出土したものである。548は中央部の床面から土圧でつぶれた状態で出土している。

所見 遺物は各壁際の覆土中層から中央部の床面にかけて出土している。特に、東壁の中央部付近から集中して遺物が出土しており、高坏などが多いことから、この付近に供献土器として置かれ、祭祀的な行為が行われた可能性が考えられる。時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第94号住居跡出土遺物観察表（第22・23図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
535	土師器	坏	13.3	4.4	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・糠	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面へラ削り、内面へラ磨き	東壁際中層	90%、PL.9
536	土師器	坏	13.4	4.6	-	長石・石英	濃い黄褐色	普通	口縁部横ナデ、体部外面へラ削り、内面へラ磨き	東壁際中層	95%、PL.9
537	土師器	坏	13.0	4.6	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面へラ削り、内面へラ磨き、底部に黒色処理痕	東壁際上層	90%、PL.9
538	土師器	坏	13.2	4.5	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	濃い橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面へラ削り、内面へラ磨き	北東コーナー	80%、PL.9
539	土師器	坏	[13.2]	4.7	-	石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面へラ削り、内面ナデ	東壁際中層	60%

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色	演	地成	手法の特徴	出土位置	備考
540	土師器	坏	11.9	4.5	-	長石・石英・雲母・糠	橙	普通	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	北西-1号溝	70%
541	土師器	高坏	15.7	10.3	11.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	普通	坏部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き、黒色処理痕、脚部内・外面ヘラ削り後ナデ	東壁際床面	85%, PL 9
542	土師器	高坏	15.1	(9.5)	-	長石・石英・糠	橙	普通	普通	坏部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き、脚部内・外面ヘラ削り	東壁際中層	80%
543	土師器	高坏	[14.4]	11.0	11.2	長石・石英・雲母	橙	普通	普通	坏部外面ヘラ削り、脚部外面ヘラ削り、内面ヘラ削り後ヘラナデ	東壁際中-下層	50%
544	土師器	高坏	-	(7.8)	11.0	長石・石英・雲母	橙	普通	普通	坏部内・外面ヘラ削り、坏部内面ヘラ磨き	東壁際中-下層	60%
545	土師器	高坏	-	(7.7)	11.0	長石・石英・雲母・糠	橙	普通	普通	脚部内・外面ヘラ削り後ナデ、裾部横ナデ	東壁際床面	50%
546	土師器	壺	8.6	16.0	-	長石・石英・糠	明黄褐	普通	普通	外面ヘラ削り後ナデ、内・外面割離、輪積み痕	東壁際下層	90%, PL 9
547	土師器	甕	[17.6]	25.6	7.4	長石・石英	にぶい橙	普通	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、体部内面ヘラナデ	覆土中	70%, PL 9
548	土師器	甕	[19.5]	(22.0)	-	長石・石英・赤色粒子・糠	にぶい橙	普通	普通	口縁部横ナデ、体部内・外面ナデ、輪積み痕	中央部床面	30%

番号	器種	径	高さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP81	白玉	0.9	0.6	0.2	0.49	長石	盤面山状・ナデ	南部壁際上層	
DP82	姉妹草	6.0	4.2	0.9	162.9	長石・石英・雲母	外面ヘラ削り後ナデ	西部床面	PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP83	勾玉	(1.1)	(1.0)	0.8	(0.98)	長石・雲母	ナデ	覆土中	PL13
DP84	不明	(4.4)	2.4	2.0	(15.5)	長石	ナデ	覆土中	
DP85	不明	3.5	2.9	1.9	14.8	長石・雲母	ナデ	南壁際床面	

第97号住居跡 (第24図)

位置 調査区西部のB 3e3区に位置し、台地北部の平坦地に立地している。

重複関係 第98号住居跡の北東壁を掘り込み、北東のコーナー部を第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.4m、短軸は3.9mの長方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は44~52cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

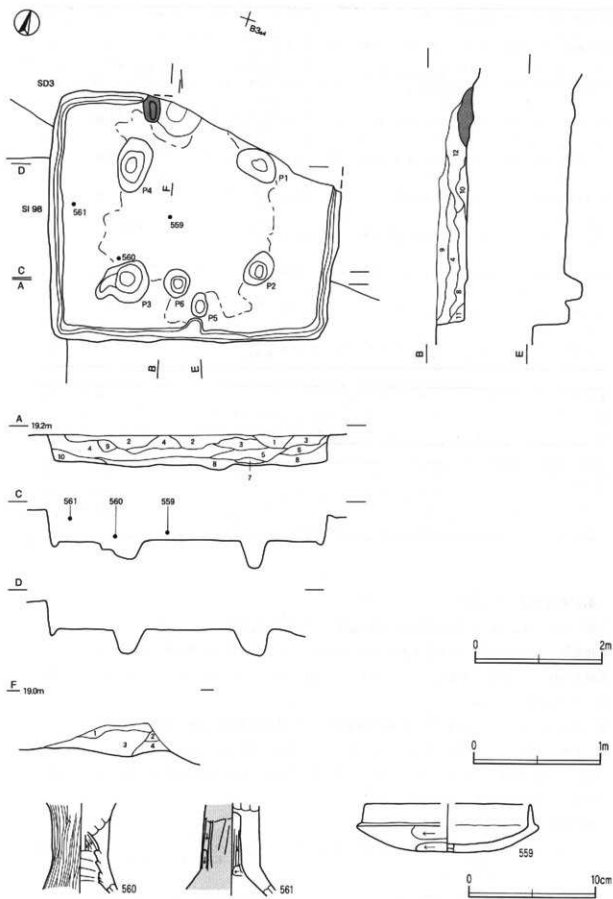
床 ほぼ平坦で、出入り口付近から主柱穴の内側にかけてよく踏み固められ、壁溝が全周している。

竈 北壁中央よりやや西側に位置している。第3号溝に掘り込まれているので、全体を明らかにすることはできないが、袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの平坦面をそのまま使用し、被熱で赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | |
|--------|--------------------------------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 4 粒子・粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子中量、砂質粒子少量、焼土ブロック微量 | 4 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粒子・粘土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、砂質 | |

ピット 6か所。P1~P4は配列から主柱穴に相当し、深さ31cm~43cmである。P5の深さは31cm、P6の深さは20cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第24图 第97号住居跡・出土遺物実測図

覆土 12層に分層される。ロームブロックを多く含み、不自然な堆積状態を示しており人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	砂質粘土・粘土粒子中量、ロームブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	9 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	10 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック少量
5 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土・粘土粒子少量
6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量		
7 黒褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片135点（坏56, 高坏4, 甕75）が出土している。その他、攪乱などにより土師質土器片2点、須恵器片5点が出土している。559は中央部の覆土下層, 560は南西部覆土中層, 561は西壁際の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から判断して、6世紀中葉と考えられる。

第97号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎	土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
559	土師器	坏	[13.]	(3.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子		にぶい緑	普通	山縁部横ナデ、体部外面へり削り、内面ナデ	中央部下層	10%
560	土師器	高坏	-	(7.2)	-	長石・石英		橙	普通	外面へら磨き、内面へら削り、輪軸みね	南西部中層	20%
561	土師器	高坏	-	(7.4)	-	長石・石英		赤褐	普通	内・外面へら削り	西壁際中層	30%

第98号住居跡（第25・26図）

位置 調査区西部のB3f2区に位置し、台北西部の平坦地に立地している。

遺構関係 東壁で第296号土坑を掘り込み、東壁を第97号住居に、北壁を第50・51号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 一辺7.7mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は50~65cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、出入り口付近から主柱穴の内側にかけてよく踏み固められ、壁溝が全周している。

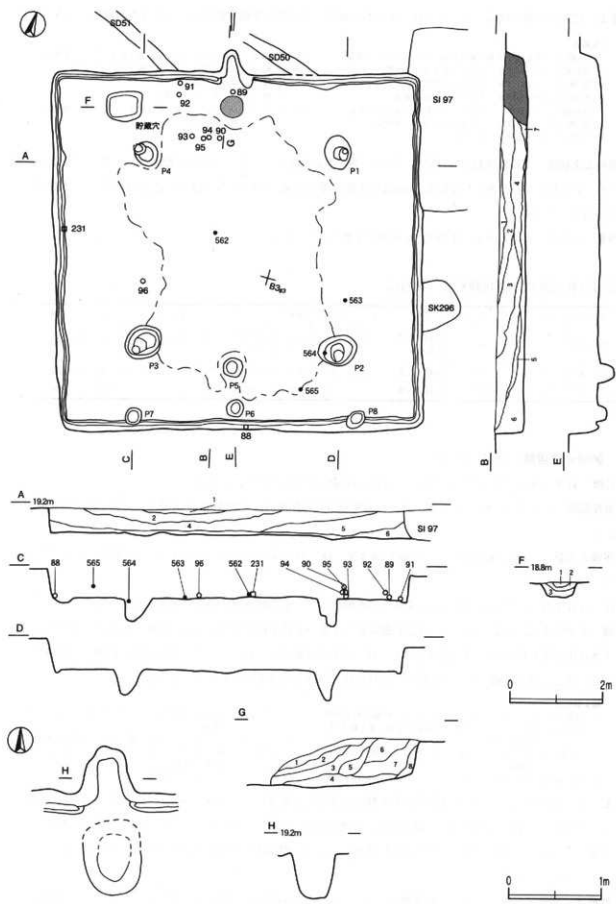
竈 北壁中央部に位置している。残存状態が悪く全体の形状が把握できないが、壁外に50cmほど掘り込み、火床部は床面を皿状に10cmほど掘りくぼめ、ローム土を埋め戻して作っている。火床面は、被熱で変硬化している。煙道部は火床面から平坦に掘り込まれた後、外傾して急激に立ち上がっている。

覆土層解説

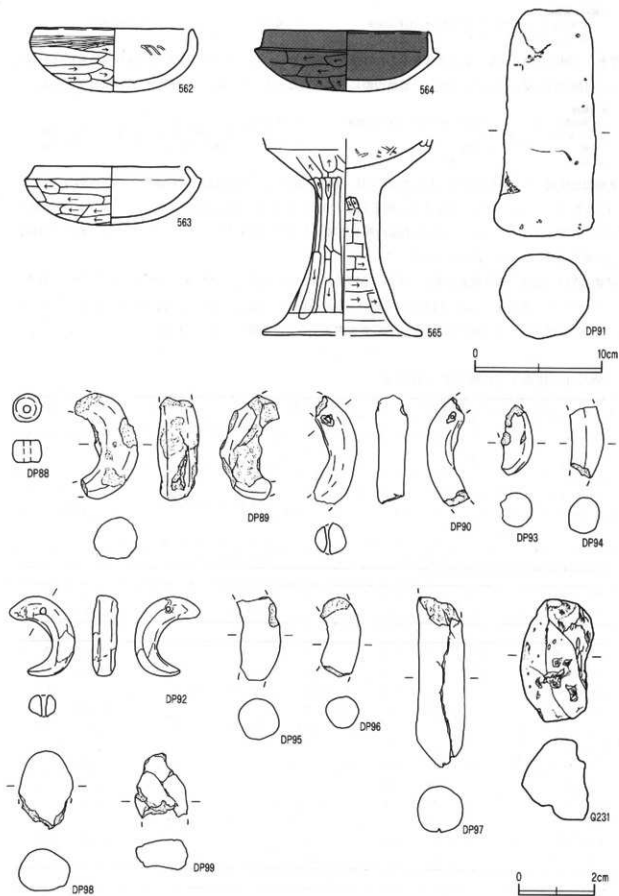
1 極暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粘土少量	5 暗褐色	砂質粘土中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、砂質粘土少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂質粘土微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土微量	7 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物・砂質粘土微量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量

ピット 8か所。P1~P4は配列から主柱穴に相当し、深さは50~66cmである。P5の深さは35cm、P6の深さは24cmで、竈と向かい合う位置にあり、中央に向かって並んでいることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7・8の深さはそれぞれ11cm・27cmで、対応する位置にあることから、上層構造にかかわるピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部よりやや竈側に位置している。長軸76cm、短軸61cmの長方形で、深さ32cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。



第25图 第98号住居跡実測图



第26图 第98号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック中層

- 3 暗褐色 ロームブロック中量・炭化粒子微量

覆土 7層に分層される。レンズ状を示した自然堆積層の間に、ロームブロックを多く含む人為堆積層がある。方形居館内に位置していることから、整地の際に埋められたと考えられる。第3層は、人為堆積層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子少量
3 褐色 ロームブロック多量
4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

- 5 黒褐色 ローム粒子少量
6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗褐色 砂質粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片1223点（坏312、高坏34、甕876、甌1）、土製品12点（勾玉7、白玉1、支脚1、不明3）、須恵器片3点（坏1、甕2）、浮子1点、鉄滓1点が出土している。563は南東の床面から、564はP2上層から正位の状態出土している。562は中央部の覆土下層から正位の状態出土している。DP90～DP95は竈付近の覆土中層から床面で出土している。

所見 本跡の竈は、残存状態が著しく悪い。意図的に壊したことが、土層断面や遺物の出土状況等から捉えることができる。竈付近からは、白玉や勾玉等の土製品が集中して出土しており、竈に係わる祭祀的行為が行われたことが推測される。時期は、出土土器と重複関係から6世紀前葉と考えられる。

第98号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
562	土師器	坏	124	5.0	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	外部外面へう前り後う磨き、内面剥離、へう磨き痕	中央部床面	95%、PL10
563	土師器	坏	120	4.7	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部横ナデ、外部外面へう前り、内面ナデ	南東部床面	95%、PL10
564	土師器	坏	130	4.8	-	長石・雲母	淡黄	普通	口縁部横ナデ、外部外面へう前り、内面ナデ	P2内上層	90%、PL10
565	土師器	高坏	-	(15.6)	[12.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面へう前り、内面剥離、へう磨き痕、脚部外面へう前り、内面へう前り	南東部中層	50%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP88	白玉	0.8	0.5	0.2	0.48	長石	縦面やや太鼓状・ナデ	南壁溝内	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP89	勾玉	(3.0)	(1.8)	1.1	(3.24)	石英・赤色粒子	ナデ	北部床面	PL13
DP90	勾玉	(2.9)	(1.1)	0.9	(2.34)	長石・雲母	孔径0.9、ナデ、片面穿孔	北部中層	PL13
DP91	支脚	18.2	7.9	6.8	1.020	長石・石英	ナデ	北部床面	
DP92	勾玉	1.6	1.7	0.7	1.38	雲母・赤色粒子	孔径1.0、ナデ、片面穿孔	北部下層	PL13
DP93	勾玉	(1.8)	(0.8)	(0.9)	(1.08)	長石・雲母	ナデ	北部床面	
DP94	勾玉	(1.9)	(0.9)	(1.0)	(1.86)	長石・石英・雲母	ナデ	北部下層	
DP95	勾玉	(1.8)	(0.8)	(0.9)	(1.08)	長石	ナデ	北部下層	
DP96	勾玉	(2.0)	(1.1)	(1.0)	(1.66)	長石・石英・雲母	ナデ	南西部床面	
DP97	不明	(4.5)	(1.3)	(1.3)	(8.35)	長石・石英・雲母	ナデ	覆土中	
DP98	不明	(2.0)	(1.4)	(1.3)	(4.06)	長石・雲母	ナデ	覆土中	PL14
DP99	不明	(1.7)	(1.4)	(0.8)	(1.72)	長石・雲母	ナデ	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q231	浮子	(3.3)	(2.0)	(2.3)	(4.02)	軽石	形状不明、鈍面磨滅	西壁溝床面	

第100号住居跡（第27・28図）

位置 調査区西部，B3i2区に位置し，台地北部の平地に立地している。

重複関係 北側で第290号土坑を掘り込み，西壁を第291号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.9m，短軸8.8mの方形で，主軸方向はN-6°-Wである。壁高は47～60cmで，やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，ややしまりがある。壁溝は北壁の攪乱部を除いて巡っている。

竈 北壁中央部に位置している。規模は，焚き口から煙道部まで143cmで，袖部幅100cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床部は床面から12cmほど皿状に掘りくぼめられており，被熱で赤変硬化している。煙道部は火床面から平坦に掘り込まれた後，壁外へ50cmほど掘り込み，外傾して急に立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|--|----------------------------------|
| 1 灰褐色 砂粒子・粘土粒子・ロームブロック中量，焼土ブロック少量 | 5 極暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 砂粒子・粘土粒子多量，ロームブロック，焼土ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量 |
| 3 暗赤褐色 ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 4 におい褐色 砂質粒子・粘土粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子微量 | 8 におい褐色 砂質粒子・粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子少量 |
| | 9 暗赤褐色 焼土ブロック多量，ローム粒子少量，炭化粒子微量 |

ピット 6か所。P1は攪乱を受けて底部をわずかに残すだけであるが，P1～P4は主柱穴に相当し，深さ59～87cmである。P5の深さは41cm，P6の深さは38cmで，竈と向かい合う位置にあり，中央部に向かって並んでいることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東部に位置している。長軸108cm，短軸60cmの隅丸長方形で，深さ40cmである。底面は平坦で壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------------------|----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |

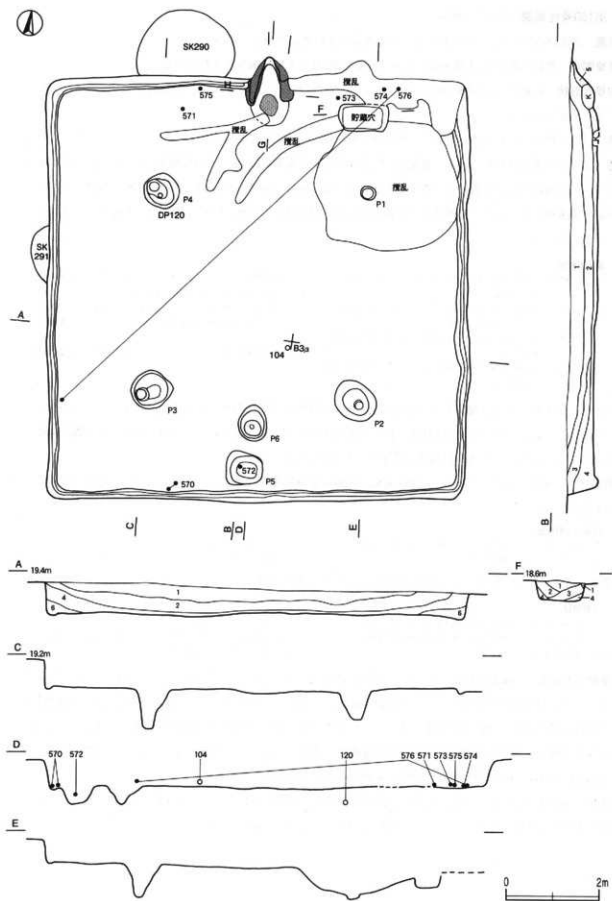
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状態を示した自然堆積である。

土層解説

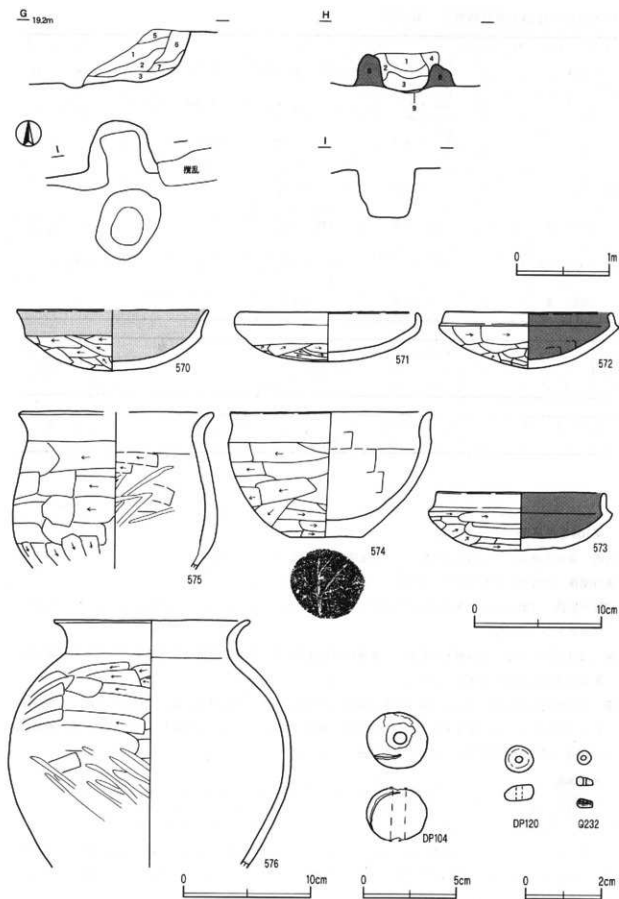
- | | |
|---------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粒子少量 |
| 3 極暗褐色 ローム粒子少量 | 6 黒褐色 ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片763点（坏211，高坏9，鉢1，甕536，瓶6），土製品2点（土玉1，白玉1），石製品1点（白玉），曜7点が出土している。その他，攪乱により混入したものとして，縄文土器片7点，須恵器片76点，土師質土器片104点，鉄滓1点が出土している。573・574・575は出土した遺物の中でも残存率が良く，北壁際の覆土下層や床面から出土しており，住居廃絶時に遺棄されたものと判断できる。570は南壁際の床面から，572はP5から，DP104は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は一辺が8mを超える大形の住居で，北壁中央部に竈がある。その右側には貯蔵穴を有し，この時期の典型的な住居形態を示している。時期は，出土土器から6世紀中葉から後葉と考えられる。



第27图 第100号住居跡実測图



第28图 第100号住居跡・出土遺物実測図

第100号住居跡出土遺物観察表 (第28回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 上	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
570	土師器	坏	15.0	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	内壁際床面	70%, PL10
571	土師器	坏	14.1	4.0	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・糠	にぶい濁	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	北壁際床面	90%, PL10
572	土師器	坏	13.1	4.5	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤濁	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	P5内	90%, PL10
573	土師器	坏	13.3	4.7	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	北壁際下層	70%
574	土師器	鉢	15.8	10.0	5.5	長石・石英・糠	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	北壁際床面	98%, 底部本蓋状、PL10
575	土師器	小形甕	15.0	(13.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ後ヘラ磨き	北壁際下層	70%
576	土師器	壺	15.4	(19.7)	-	長石・雲母・糠	灰濁	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、ヘラ磨き、内面ナデ	北壁際床面	30%

番号	器 種	径	厚 さ	孔 径	重 量	胎 上	特 徴	出土位置	備 考
DP104	土玉	3.2	(2.7)	0.7	(23.90)	長石・雲母	ナデ	中央部下層	PL14
DP120	白土	0.8	0.4	0.2	0.21	雲母	側面太鼓状・ナデ	P4内	

番号	器 種	径	厚 さ	孔 径	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q232	白土	0.4	0.1	0.4	0.04	滑石	側面は円筒状、片面穿孔	覆土中	

第104号住居跡 (第29・30回)

位置 調査区東部のB5ji区に位置し、台地北部の緩斜面に立地している。

重複関係 北壁側と南東コーナー部を第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.2m、短軸は7.1mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は8~61cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。やや締まりがあり、竈前面に硬化面が見られる。壁際は攪乱を受けた部分と、第3号溝に掘り込まれた部分を除き運っている。

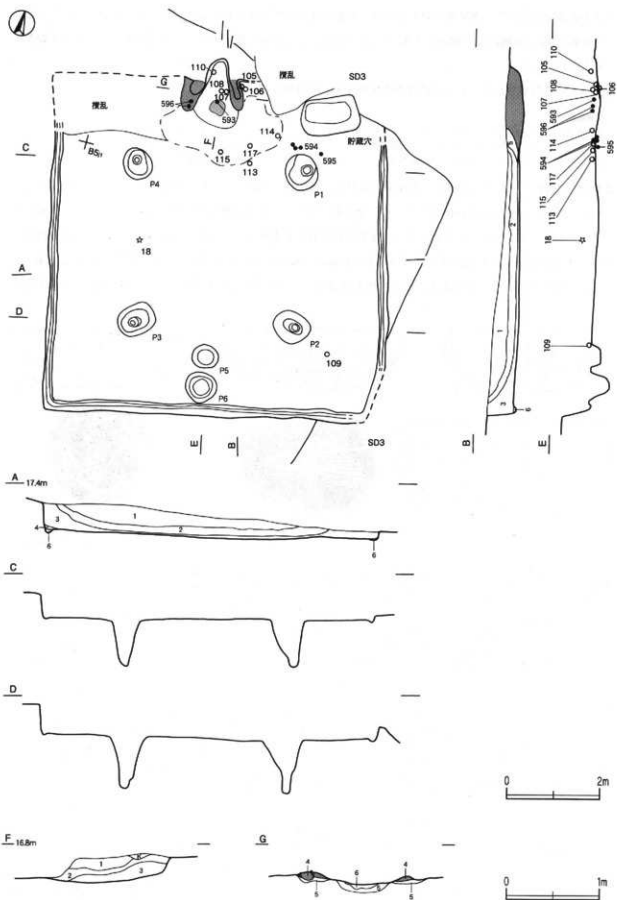
竈 北壁中央部に位置している。第3号溝に掘り込まれているため遺存状態が悪く、火床部と吹き口部が確認されただけである。火床部は床面を19cmほど風状に掘りくぼめ、ローム土を埋め戻して作っている。袖部基部だけが残っており、突き固めたローム土を芯材としている。

竈土層解説

- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・砂質粒子・粘土粒子少量 | 4 暗褐色 ロームブロック多量、粘土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 にぶい赤濁 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 |

ピット 6か所。P1~P4は配列から主柱穴に相当し、深さ95~108cmである。P5の深さは22cm、P6の深さは41cmで、竈に向かい合う位置にあり、中央部に向かって並んでいることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。第3号溝跡に北側壁が掘り込まれおり、南側壁の立ち上がりと底面



第29图 第104号住居跡実測図

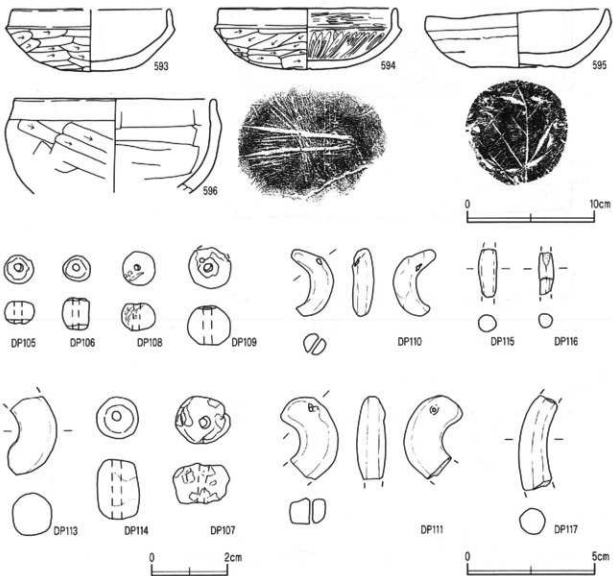
だけが確認されている。南側壁の立ち上がりと底面の残存状態が半分以上あることから、貯蔵穴の規模と形状は、長軸120cm、短軸76cmの隅丸長方形で、深さ38cmほどであると推定される。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状態を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片1206点（坏190，高坏136，甕877，瓶3），土製品12点（白玉4，勾玉3，小玉1，土玉1，不明3），種子1点が出土している。その他、須恵器片29点，礫5点，鉄滓2点，羽口3点，炉壁1点が出土しているが，混入したものである。土器片は全体的に散在しているが，DP105～DP108・DP110・DP111・DP113～117は，竈内部や付近の覆土下層部から床面でまとも出土している。594・595は，おおむね良好な残存状態で，土製品が出土した場所とほぼ同じ位置の床面から出土している。593は竈内からの出土



第30図 第104号住居跡出土遺物実測図

である。

所見 竈内とその付近には、勾玉・土玉などの土製品がまとまって出土している。これらの土製品は、覆土下層から床面で出土している。ほとんどの遺物が細片である中、593～595は残存率が高い状態で、土製品が出土した場所とほぼ同じ位置で出土している。それらの出土状態から住居廃絶時に祭祀的な行為が行われた可能性がある。時期は、出土土器から7世紀前後と考えられる。

第104号住居跡出土土物観察表(第30回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
593	土師器	坏	[124]	4.9	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ、内面割離	竈内	80%、PL11
594	土師器	坏	13.8	4.9	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ後ヘラ磨き	北東部床面	80%、外面瓦石転用痕、PL11
595	土師器	坏	14.3	4.6	7.8	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り後ナデ、輪縁み痕、内面ナデ	北東部床面	95%、底部木製痕、PL11
596	土師器	甗	15.5	(7.6)	-	長石・石英・赤色粒子・塵	にぶい黄褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ	竈内	30%

番号	器種	径	高さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP103	白玉	0.8	0.6	0.20	0.36	長石	顔面太鼓状・ナデ	竈東部床面	PL13
DP106	白玉	0.7	0.8	0.20	0.46	長石	側面やや太鼓状・ナデ	竈東部床面	PL13
DP107	白水	1.5	1.1	0.25	1.82	長石・雲母	顔面円筒状・ナデ	竈内	PL13
DP108	小玉	0.9	0.7	0.15	0.54	長石	ナデ	竈内	PL13
DP109	土玉	1.0	1.0	0.20	(1.30)	長石・雲母	ナデ	南東部下層	PL13
DP114	白玉	1.1	1.6	0.20	2.20	長石・雲母	顔面円筒状・ナデ	北東部下層	PL13

番号	器種	径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考	
DP110	勾玉	2.6	1.7	0.90	2.54	長石・雲母	孔徑0.1、片面穿孔、ナデ	竈内	PL13
DP111	勾玉	(3.3)	(2.3)	1.10	(7.05)	長石・赤色粒子	孔徑0.1、片面穿孔、ナデ	竈内	PL13
DP113	勾玉	(2.1)	(1.25)	1.10	(2.70)	長石・赤色粒子	ナデ	竈手前下層	PL13
DP115	不明	(1.9)	0.7	0.65	(0.90)	長石	ナデ		
DP116	不明	(1.61)	0.6	0.54	(0.53)	長石・石英・雲母	ナデ	覆土中	
DP117	不明	(3.7)	1.0	1.00	(5.60)	長石	ナデ	竈手前下層	PL14

表2 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主要方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸	塚高 (m)	床面	内部施設						出土土器	備考 (時期)	
							物置	土坑	石蔵	ピット	人1	印電			
51	B3-06	N-24°-W	方形	5.6×(5.2)	22~40	平坦	全周	-	-	1	-	如	人器	土師器(高坪・埴・壺)	5世紀中葉
53	B3-06	N-10°-W	長・方形	4.6×(3.6)	25~40	平坦	全周	-	2	-	2	如2	自然	土師器(高坪・埴・壺)	5世紀中葉
80	B2-09	N-25°-W	方形	8.1×8.0	25~28	平坦	全周	3	1	-	-	如	人器	土師器(高坪・埴・壺・小形壺)、心鏡品(瓦孔口)	5世紀後半
90	B3-15	N-5°-W	方形	6.0×5.8	28~44	平坦	全周	4	1	-	1	電	人器	土師器(埴・高坪・壺・壺)、土製白瓦	6世紀後半
91	B3-14	N-8°-W	長・方形	3.8×(2.7)	16~20	平坦	部	-	-	-	-	-	人器	土師器(埴・壺・壺)	5世紀中葉
94	B2-08	N-10°-W	方形	7.3×7.2	46~61	平坦	全周	4	1	-	2	電	自然	土師器(高坪・壺)、1個(埴・壺)等(瓦子口)、瓦子口	6世紀後半
96	B2-05	N-37°-W	方形	5.1×5.0	22~66	平坦	全周	-	1	4	1	如2	自然	土師器(高坪・壺)、高坪(瓦子口)、#3ス、#4ス、#5ス	5世紀後半

番号	採 沢	主軸方向	平面形	縦横(m) 長軸×短軸	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設					覆土	出 上 遺 物	備 考 (時 期)
							壁溝	柱穴	竈穴	ピット	入口			
97	B3e3	N-10°-W	長方形	4.4×3.9	44~52	平垣	全周	4	-	-	2	瓦	土師器(高坏)	6世紀中葉
98	B3f2	N-17°-W	方形	7.7×7.7	30~65	平垣	全周	4	1	2	2	瓦	土師器(高坏・高坏)、土製品(口E・A・K・支脚)	6世紀前半
99	B2g0	N-36°-W	方形	4.8×4.8	18~27	平垣	全周	3	1	-	-	瓦	土師器(高坏・高坏)	5世紀中葉
100	B3f2	N-6°-W	方形	8.9×8.8	47~60	平垣	全周	4	1	-	2	瓦	土師器(高坏・高坏)、土製品(口E)、石製品(口E)	6世紀中~後半
104	B5j1	N-16°-W	方形	7.2×7.1	8~61	平垣	全周	4	1	-	2	瓦	土師器(高坏・高坏)、土製品(小玉・白土・勾玉・土師)	7世紀前半

表3 古墳時代土坑一覽表

土坑 番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		壁面	床面	覆土	出 上 遺 物	備 考 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
262	B2f9	N-48°-W	楕円形	1.2×1.1	20	外傾	平坦	人為	土師器片(高坏)	
283	B2g7	-	円形	2.7	80	外傾	平坦	人為	土師器片(高坏・高坏・葉)	本跡→SI-94
290	B3h2	-	円形	2.1	60	外傾	平坦	人為	土師器片(高坏)	本跡→SI-100

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒、土坑1基を確認した。以下、検出された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第93号住居跡 (第31・32回)

位置 調査区西部のB316区に位置し、台地北部の平坦地に立地している。

重複関係 第90号住居跡の東壁を掘り込んでいる。

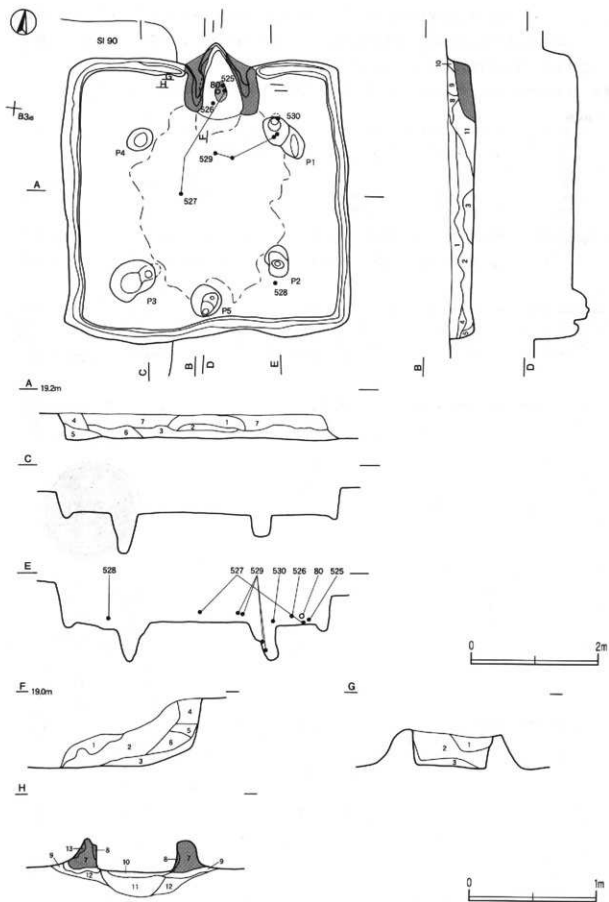
規模と形状 長軸4.5m、短軸は4.4mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は46~66cmで、壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、出入り口付近から主柱穴の内側にかけてよく踏み固められ、壁溝が全周している。

竈 北壁中央部に位置している。規模は、焚き口から煙道部まで122cmで、袖部幅119cmである。壁外への掘り込みは33cmほどである。火床部は床面を24cmほど凹状に掘りくぼめ、ローム土で埋め戻して作っている。袖部は砂質粘土で構築されている。煙道部は火床面からはほぼ平坦に掘り込まれた後、ローム土と砂質粘土によって構築され、急激に立ち上がっている。袖部内面と火床面は被熱で赤変硬化していることから、長期間使用していたと考えられる。

竈土層解説

1 灰褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	8 濃い褐色	粘土粒子多量、焼土粒子中量、砂質粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粒子・粘土粒子少量	9 暗褐色	ロームブロック中量、砂質粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
3 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・砂質粒子少量	10 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量、砂質粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	11 暗赤褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量、砂質粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	12 暗褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量
6 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量	13 暗赤褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・砂質粒子少量
7 濃い暗褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・砂質粒子少量、焼土ブロック微量		



第31图 第93号住居跡実測图

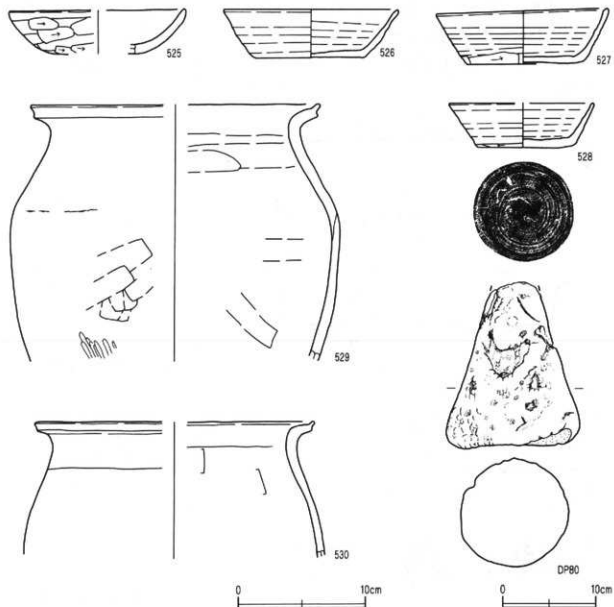
ピット 5か所。P1・P2は深さ57cm・59cm, P3・P4は深さ28cm・39cmである。住居の東側と西側のピットでは深さに差があるが、配列から支柱穴に相当する。P5は深さ26cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層に分層される。焼土やロームブロックを多く含む不自然な堆積状態を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|---------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 灰褐色 | 粘土粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | 11 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子・粘土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |
| 6 暗褐色 | ロームブロック多量, 焼土ブロック・炭化物少量 | | |
| 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片317点(坏31, 甕286), 須恵器片74点(坏67, 甕7), 支脚1点, 鉄滓1点, 種子1点(桃)が出土している。遺物は、覆土の上層から床面までみられ、散在した状態で出土している。529は中央部



第32図 第93号住居跡出土遺物実測図

の覆土中層から下層にかけてとP1内から出土した破片が接合したものであり、住居廃絶時に投棄されたと考えられる。527は住居中央部の覆土下層から出土したものと竈の火床面から出土したものが接合した坏である。

所見 時期は、出土土器8世紀中葉から後葉と考えられる。

第93号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎	上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
525	土師器	坏	[140]	(35)	-	長石・雲母・赤色粒子		明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	竈内	15%
526	須恵器	坏	138	3.9	8.8	長石・石英・雲母・赤色粒子		にぶい黄褐色	普通	体部内・外面ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ	竈内	70%、PL11
527	須恵器	坏	136	4.4	9.3	長石・石英・雲母		灰青褐	普通	体部下縁ヘラ削り、底部回転ヘラ切り後一方方向のヘラ削り	竈内・中央下層	70%、PL11
528	須恵器	坏	[115]	3.6	8.0	長石・石英・雲母		灰	普通	体部下縁回転ヘラ削り、内外面ナデ、底部回転ヘラ切り	南東部下層	70%、PL11
529	土師器	甕	[228]	(20.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子		にぶい褐	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラナデ・下位ヘラ削り、内面ヘラナデ、輪積み肌	中央部下層・P1	10%
530	土師器	甕	[220]	(10.8)	-	長石・石英・雲母		橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデ	北東部下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎	七	特徴	出土位置	備考
DP80	支脚	(17.2)	14.2	14.0	(1.740)	長石・石英		ナデ	竈内	

第101号住居跡（第33図）

位置 調査区東部のC4c9区に位置し、台地北部の緩斜面に立地している。

規模と形状 南側部分が調査区域外に延びているため、確認部分では長軸3.1m、短軸1.5mである。主軸方向はN-20°-Wで、方形または長方形と推定される。壁高は44~46cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められ、壁溝が巡っている。

竈 北西壁に位置している。規模は、吹き口から煙道部まで112cmで、袖部幅110cmである。壁外への掘り込みは62cmほどである。火床部は床面から30cmほど掘りくぼめ、ローム土を埋め戻してして火床面を作り、その上に袖部から煙道部までを砂質粘土で構築されている。煙道部は火床面からほぼ平坦に掘り込まれた後、外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 砂質粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量 | 8 暗褐色 | 砂質粒子・粘土粒子中量、焼土粒子少量 |

ピット 1か所。深さ19cmである。性格は不明である。

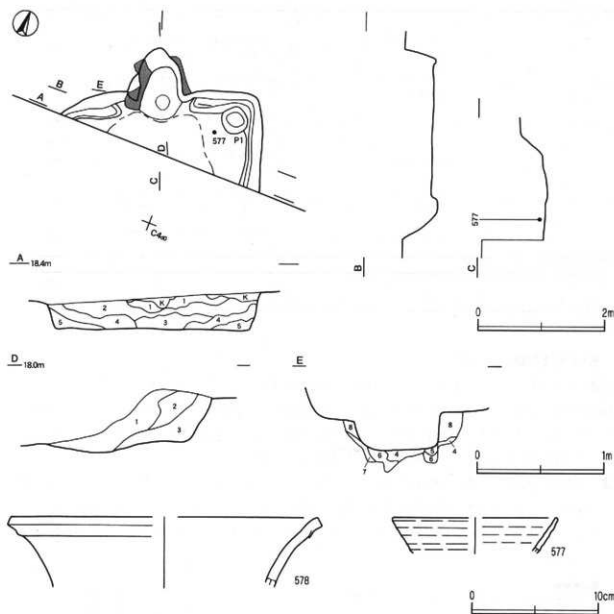
覆土 5層に分層される。ロームブロックを多く含み、不自然な堆積状態を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片67点(坏10, 甕57), 須恵器片14点(坏11, 甕3), 礫1点, 土師質土器片9点, 鉄滓3点が出土している。土師質土器片は, 覆土上層から出土しており, 本跡が中世の方形居館内に位置していることから, 整地の際に流れ込んだものと考えられる。577は住居北東部の覆土下層から出土している。

所見 南側が調査区外に延びているため, 全体の形状は把握できない。時期は, 出土土器から8世紀後半と考えられる。



第33図 第101号住居跡・出土遺物実測図

第101号住居跡出土遺物観察表(第33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎	土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
577	須恵器	坏	[12.9]	(2.8)	-	長石・石英・雲母	灰	灰	普通	普通	体部口口整形	北東部下層	5%
578	須恵器	甕	[24.0]	(5.5)	-	長石・石英・雲母・礫	黄灰	黄灰	普通	普通	口縁部折り返し・外面横位の平行明き, 内面ロクロナデ	覆土中	5%

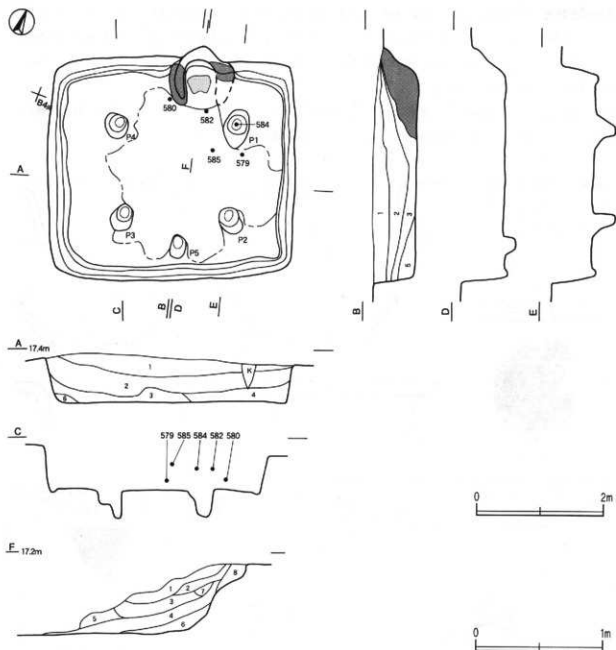
第102号住居跡 (第34・35図)

位置 調査区西部のB4j8区に位置し、台地北部の緩斜面に立地している。

規模と形状 長軸3.9m、短軸は3.5mの方形で、主軸方向はN-23°-Wである。壁高は55~68cmで、壁はやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、出入り口付近から支柱穴の内側にかけてよく踏み固められ、壁溝が全周している。

竈 北壁の中央部よりやや東に位置している。規模は、焚き口から煙道部まで102cm、袖部幅103cmで、壁外への掘り込みは20cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床面は、床面と同じ高さの平坦面をそのまま使用し、被熱で赤変硬化している。煙道部は、火床面から外傾して立ち上がっている。



第34図 第102号住居跡実測図

覆土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|---------|----------------------|
| 1 濃い赤褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 濃い赤褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子・粘土ブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子多量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化物少量、粘土粒子微量 | 7 濃い赤褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化物中量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物多量、粘土ブロック少量 | 8 褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子中量 |

ピット 5か所。P1～P4は配列から主柱穴に相当し、深さ36cm～46cmである。P5は深さ20cmで、南壁寄りの中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

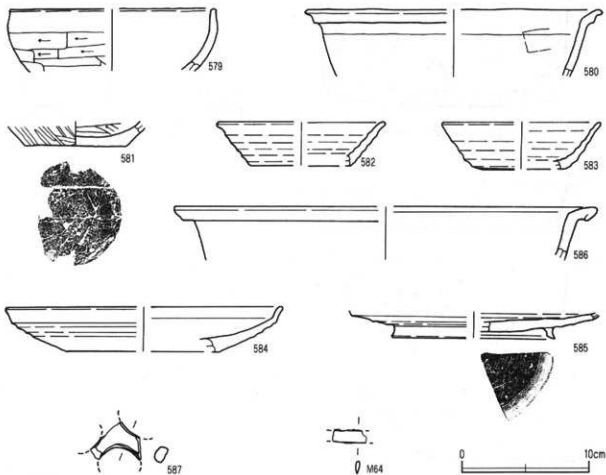
覆土 6層に分層される。堆積状態はレンズ状を示しているが、ロームブロックを多く含んだ層があり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片232点(坏24, 碗1, 高台付坏1, 瓶1, 甕205), 須恵器片21点(坏11, 蓋2, 盤2, 甕4, 瓶2), 鉄製品1点(刀子カ) 鉄滓4点が出土している。出土した土器は細片で、ほとんどが覆土中層からの出土である。579・580・582・584・585は北東コーナー付近の覆土中層から下層にかけて出土したものである。M64は覆土上層から出土している。

所見 遺物はほとんどが細片で、北東コーナー部と南西コーナー部でまとまって出土しており、住居廃絶時に投棄したものと考えられる。時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第35図 第102号住居跡出土遺物実測図

第102号住居跡出土土物観察表 (第35図)

番号	種別	器種	口径	底径	底径	胎	土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
579	土師器	碗	16.1	(5.0)	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい霞	普通	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ	東部下層	20%
580	土師器	瓶	23.4	(5.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤霞	普通	普通	口縁部断面三角の隆起貼り付け後横ナデ、体部内面ヘラナデ	庭西側下層	5%
581	土師器	壺	-	(2.0)	8.0	石英・雲母	明赤褐	普通	普通	体部外面下端ヘラ磨き、内面ヘラ削り	北西部覆土中	5%、木葉紙
582	須恵器	坏	13.4	3.5	(8.0)	石英・雲母	にぶい黄緑	普通	普通	体部口クロ整形後ナデ	庭手前中層	5%
583	須恵器	坏	12.6	3.8	(7.0)	石英・雲母	灰黄	普通	普通	体部口クロ整形、外面ト端輪転ヘラ削り	北西部覆土中	5%
584	須恵器	甗	22.2	(3.6)	(12.1)	長石・石英・雲母	灰黄	普通	普通	底部回転ヘラ削り	北東部中層	30%
585	須恵器	壺	-	(2.1)	(13.0)	長石・石英・雲母	黄灰	普通	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	東部上層	10%
586	須恵器	瓶	33.8	(4.3)	-	石英・雲母	灰黄	普通	普通	体部外面横位の平行印き、口縁部折り返し	覆土中	5%
587	須恵器	瓶	-	(0.7)	-	石英・雲母	灰黄	普通	普通	両面ナデ	庭内	5%、多量式の底部

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M61	刀子	(2.7)	1.0	0.3	(1.54)	鉄	断面三角形、刃部の一部	南東部覆土中	

第103号住居跡 (第36・37図)

位置 調査区東部のB4c7区に位置し、北部台地の緩斜面に立地している。

規模と形状 長軸5.6m、短軸は5.5mの方形で、主軸方向はN-24°-Wである。壁高は32~48cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、出入り口付近から主柱穴の内側にかけてよく踏み固められ、壁溝が全周している。床は貼床である。コーナー部は20cmほど掘り下げ、ローム土を埋めて貼床としている。

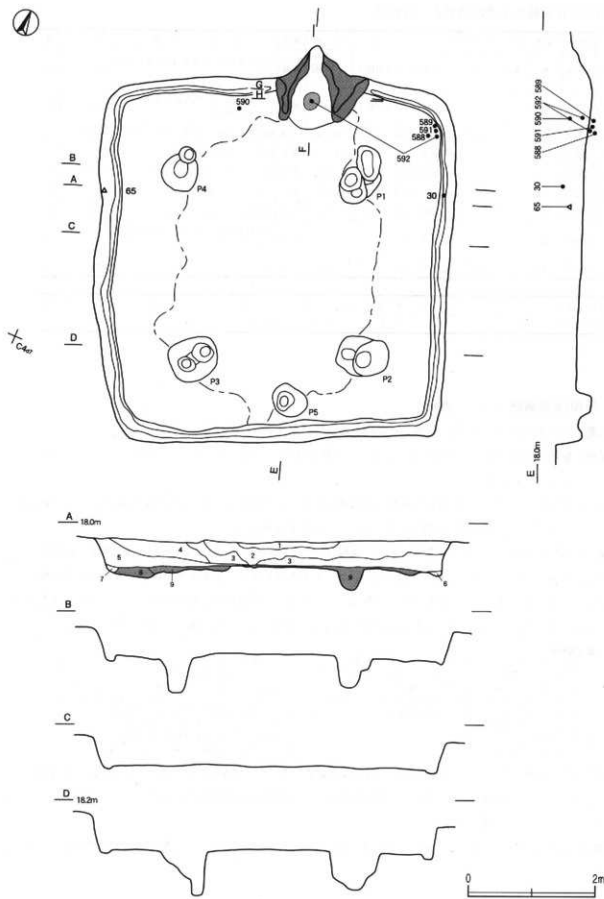
竈 北壁中央部よりやや東に位置している。規模は、焚き口から煙道部まで134cmで、袖部幅144cmである。火床部は床面を10cmほど皿状に掘りくぼめられ、ローム土を埋め戻して火床部を作っている。火床面は被熱で赤変している。袖部はローム土を掘り残して基部とし、その上に砂質粘土で構築されている。煙道部は火床面から平坦に掘り込まれた後、壁外へ45cmほど掘り込まれており、緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|----------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック微量 | 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土ブロック微量 | 11 暗褐色 | 焼土ブロック中量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック少量、砂質粒子・粘土ブロック微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック中量、砂質粒子・粘土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 13 にぶい暗赤 | 砂質粒子中量、ローム粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子少量 | 14 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量 | 15 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック少量 |
| 8 黒褐色 | 焼土粒子少量 | 16 暗赤褐色 | 砂質粒子中量、焼土粒子微量 |

ピット 5か所。P1~P4は配列から主柱穴に相当し、深さ36~73cmある。各ピットの底面からは柱のあたり痕が2か所ずつ確認されている。P5は深さ25cmで、南壁寄りの中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層に分層される。レンズ状の堆積を示しているが、ロームブロックを多く含む不自然な層がある人為堆積である。

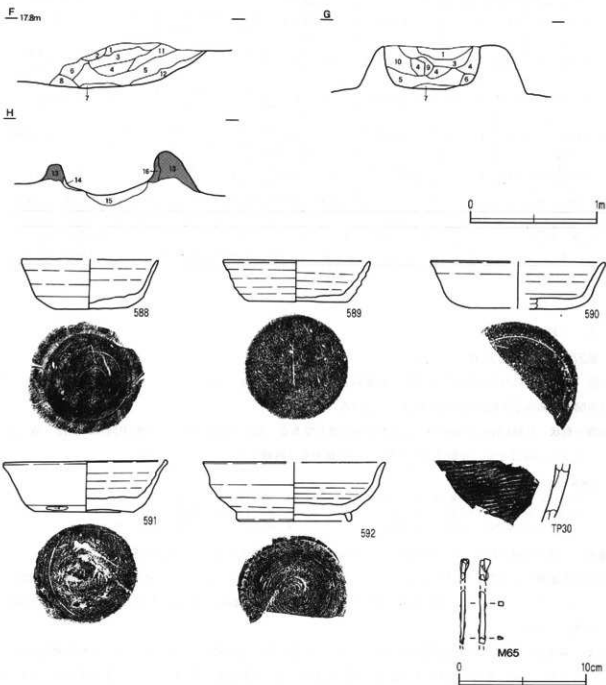


第36图 第103号住居跡実測图

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土ブロック微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片1000点(坏116, 碗1, 高坏4, 甕876, 瓶3), 須恵器86点(坏48, 高台付坏5, 蓋2, 甕31), 鉄製品1点(鉄鎌カ), 鉄滓18点, 羽口17点, 炉壁6点, 礫1点, 粘土塊20点が出土している。これらの遺物は, 主に北東部の上層から床面にかけて出土している。その他, 剥片1点, 双孔円板1点, 耳環1点が混入している。588・589・591・592は北東コーナー部の床面からまともに出ており, 592は火床部から出



第37図 第103号住居跡・出土遺物実測図

土した破片と接合関係にある。T P30は東壁際の覆土上層、M65は西壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の主柱穴からは柱のあたり痕が2か所ずつ見られ、建て替えが行われたと考えられる。竈は袖部内面が被熱で赤変していることから、長期間使われていたと考えられる。出土した遺物は、北東コーナー部から中央部に向かって散在しており、床面からまともに出て出土している。これらの遺物は、住居廃絶時に一括投棄されたもので、本跡に伴うものと判断できる。時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。

第103号住居跡出土遺物観察表(第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
588	須恵器	坏	[10.8]	4.0	5.8	長石・雲母・赤色粒子	灰黄(中濃黒)	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ、下部回転ヘラ削り、内面剥離	北東コーナー部	70%
589	須恵器	坏	11.6	3.3	8.1	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部ヘラ削り後ナデ、体部内・外面ナデ	北東コーナー部	85%、底部外面ヘラ剥離、上、PL11
590	須恵器	坏	[11.8]	3.8	[9.8]	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後ナデ、体部内・外面ナデ	北壁際中層	30%
591	須恵器	坏	12.7	4.1	7.8	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り、下層ヘラ削り	北東コーナー部	80%、PL11
592	須恵器	高台付坏	[14.3]	4.7	8.7	長石・石英・雲母・斜状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、体部内・外面ナデ	北東コーナー部	55%、PL11
TP30	須恵器	差	-	(4.7)	-	長石	灰黄陶	良好	体部外面横位の平行叩き、内面輪積み痕	東壁際上層	5%、PL13

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M65	鉄鏝*	(5.9)	0.8	0.4	(2.7)	鉄	断面方形の棒状、基部の縦溝あり	西壁際中層	

(2) 土坑

第276号土坑(第38図)

位置 調査区西部のB2h7区に位置し、台地縁辺部の緩斜面に立地している。

重複関係 第94号住居跡の西壁を掘り込んでいます。

規模と形状 長軸1.8m、短軸0.85で、深さは60cmほどである。形状は長方形で、長軸方向はN-13°-Wである。深さは60cmほどで、底面は平坦である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

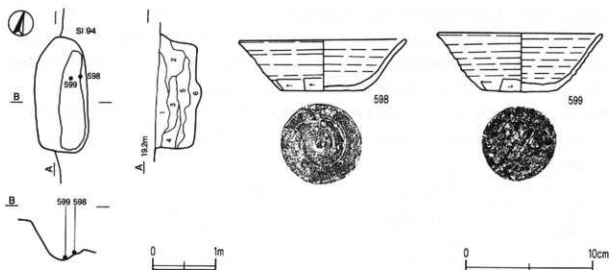
土層観察

1	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	極暗褐色	ロームブロック多量
2	暗褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	5	極暗褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6	暗褐色	ロームブロック中量

覆土 6層に分層される。ロームブロックを含み、不自然な堆積状態を示した人為堆積である。

遺物出土状況 須恵器2点(坏)が出土している。598は逆斜位で、599は逆位の状態で、2点が底面のほぼ同じ位置から出土している。どちらも被熱で器壁の剥離が著しい。598は内外面に煤が付着している。599は内外面が赤変している。

所見 本跡からは坏2点がほぼ完形の状態で出土している。どちらも器壁の剥離が著しく、長い間被熱を受けていたと考えられ、重ねて使用した痕跡もあることから、竈の支脚として転用していた可能性がある。土坑の性格は不明であるが、時期は出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第38図 第276号土坑・出土遺物実測図

第276号土坑出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
598	須恵器	環	13.1	4.1	5.6	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り，体部外面下濶手持ちヘラ削り，内外面割離	北部底面	90%内外面割離，土質転用，孔目
599	須恵器	環	13.2	4.8	5.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰白	普通	底部一方向のヘラ削り，体部外面下濶手持ちヘラ削り，内外面割離	北部底面	90%斜片着，裏面割離転用，孔目

表4 奈良・平安時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸	埋高 (cm)	床面	内部施設					土質	出土遺物	発考 (時期)
							壁溝	柱穴	石礎穴	ピット	入口			
93	B 3 36	N-4°-W	方形	4.5×4.4	46-66	全面	4	-	-	1	竈	人為	土師器(坏・甕)，須恵器(坏)，土製品(文部)種子(焼)	8世紀中～最末
101	C 4 c9	N-20°-W	長方形	3.1×11.5	44-46	全面	-	-	1	-	竈	人為	須恵器(坏・甕)	8世紀後半
102	B 4 36	N-22°-W	長方形	3.9×3.5	55-68	全面	4	-	-	1	竈	自然	土師器(坏・甕・甗)，須恵器(坏・甕・甗)	8世紀中葉
103	C 4 c7	N-24°-W	方形	5.6×5.5	32-48	全面	4	-	2	1	竈	自然	須恵器(坏・高台付坏)	8世紀前半

3 中世の遺構と遺物

今回の調査では，中世の館跡に伴う方形区画堀跡1条と掘立柱建物跡2棟を確認した。以下，遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

第3号溝跡 (方形区画堀跡) (第4・39・40図)

位置 東西調査区の北部B 2 c8～B 5 i3区に位置し，舌状台地縁辺部の緩斜面に立地している。

重複関係 第89・95・97・104号住居跡を掘り込み，第53・55号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西南部が未調査であるが3辺が確認され，南北の外辺115.5m，内辺107.5m，東西の外辺115.2m，内辺108mで，方形に歪っていると推定される。南北の軸線はN-10°-Eを指している。堀の上幅は3.6～6.0m，

下幅は0.9～1.3m、深さ1.0～1.7mほどである。底面は傾斜しており、北側の堀では西から東に向かって、東側の堀では南から北に向かって低くなっている。比高は北側の堀で2.2m、東側の堀で2.9mである。南側の堀は未調査の部分があるが、東から西に向かって低くなり、比高0.4mとなっている状況から、北東部と南西部が深く掘り込まれていると推定される。堀の断面形状は、壁面が外傾した箱薬研を呈している。

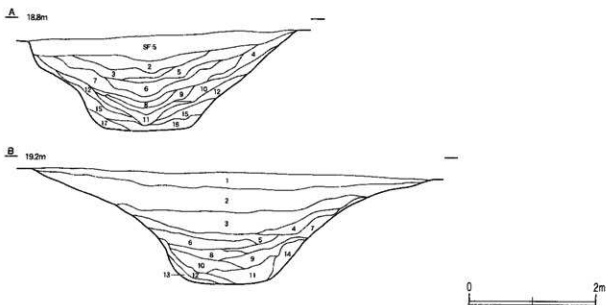
覆土 重なるように交互に流れ込み、堆積方向が変わる掘特有の堆積状態で、レンズ状を示した自然堆積である。第12・14・15層に層が掘られた痕跡があり、堀さらいが行われたものと考えられる。

土層解説 (A・B共通)

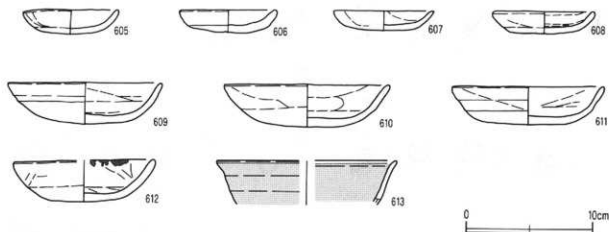
1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	10 暗褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量	11 暗褐色	ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化物微量
3 暗褐色	ロームブロック少量	12 褐色	ローム粒子中量
4 褐色	ローム粒子中量、炭化物・砂粒少量	13 黒褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・砂粒微量
5 灰暗褐色	ローム粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・砂粒微量
6 暗褐色	ロームブロック少量	15 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・炭分少量
7 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	16 灰みず色	ロームブロック・粘土粒子中量、炭分少量
8 褐色	ローム粒子中量	17 暗褐色	ロームブロック多量、炭分中量
9 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量		

遺物出土状況 土師器片976点(坏145, 高台付坏1, 高坏24, 甕803, 甗2, 手捏土器1), 須恵器片82点(坏33, 甕46, 蓋2, 盤1), 土師質土器片64点, 白磁片1点, 播鉢片1点, 石器2点(尖頭器1, 石皿1)が出土している。ほとんどが混入したもので、本跡に伴う遺物は、堀の北東コーナー部下層から底面から出土した605, 607, 608, 610である。前回調査した東側の第1号土橋跡付近から出土した土師質土器と同じものが出土しており、土橋との比高が1.7mあることから土橋側から流されてきたものと考えられる。613は、覆土上層から出土している。

所見 本跡は、方形に区画された堀跡で、一辺が一町である。方形区画堀内からは掘立柱建物跡も確認されており、領主の館に伴う堀と考えられる。中世前半に見られる方形居館の典型であり、時期は、前回調査した第1土橋跡付近から出土した土師質土器と同じものが、北東コーナー部の堀底面から出土していることから、13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。



第39図 第3号溝跡(方形区画堀跡)実測図



第40図 第3号溝跡（方形区画堀跡）出土遺物実測図

第3号溝跡（方形区画堀跡）出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
605	土師瓦土器	小皿	7.5	2.0	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	北東コーナー裏面	98%、PL12
606	土師瓦土器	小皿	7.6	1.9	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	南東部覆土中	90%、PL12
607	土師瓦土器	小皿	8.0	1.6	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	北東コーナー裏面	60%、PL12
608	土師瓦土器	小皿	8.0	1.8	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	北東コーナー裏面	90%、PL12
609	土師瓦土器	皿	12.2	3.3	-	石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	北部下層	98%、PL12
610	土師瓦土器	皿	13.0	3.4	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	北東コーナー裏面	85%、PL12
611	土師瓦土器	皿	12.1	3.1	-	石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	西部覆土中	60%、PL12
612	土師瓦土器	皿	[11.0]	3.4	-	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ，体内・外面ナデ	西部下層	6%、油漕付乳白
613	磁器	皿	[14.2]	(3.5)	-	緻密	灰白	良好	体部コロボ形内面口縁部先端輪ナシ	覆土上層	孔・明眼付乳白

(2) 掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡（第41図）

位置 調査区東部のB4j9区に位置し，北部台地縁辺部の緩斜面に立地している。

規模と構造 桁行3間，梁行1間の側柱式の建物跡で，桁行方向をN-67°-Wとする東西棟である。規模は桁行2.5mで，柱間寸法は0.9mを基調としている。梁行は東側2.1m，西側2.3mで，ばらつきがある。

柱穴 平面形は円形を呈し，長径21~40cm，短径18~36cm，深さ7~24cmである。ピット内の覆土は2層からなり，ブロック状の堆積状態を示した人為堆積である。

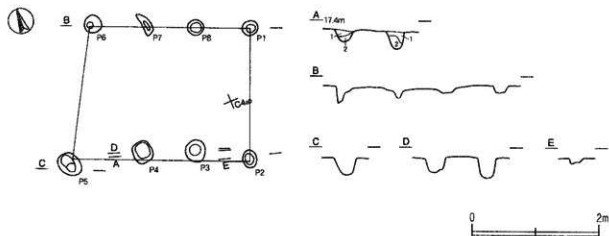
遺物出土状況 出土していない。

土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色 ロームブロック多量

2 暗褐色 ロームブロック中量

所見 方形区画堀内，北側堀の軸線を意識した方向であることから，13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。



第41図 第14号掘立柱建物跡実測図

第15号掘立柱建物跡（第42図）

位置 調査区東部のC4a0区に位置し、北部台地縁辺部の緩斜面に立地している。

規模と構造 桁行3間、梁行1間の側柱式の建物跡で、桁行方向をN-76°-Wとする東西棟である。規模は桁行2.1mで、梁行は1.8mである。柱間寸法は桁行が0.6mを基調としている。

柱穴 平面形は円形を呈し、長径21~43cm、短径18~34cm、深さ7~24cmである。柱の抜き取り痕は第1層が相当する。使用されていた柱は、径10cmほどの丸太材と考えられる。

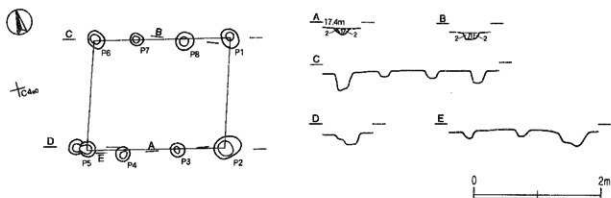
土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土していない。

所見 方形区前場内で、北側の堀と軸線を合わせた方向であることから、13世紀後葉から14世紀前葉と考えられる。



第42図 第15号掘立柱建物跡実測図

表5 掘立柱建物跡一覧表

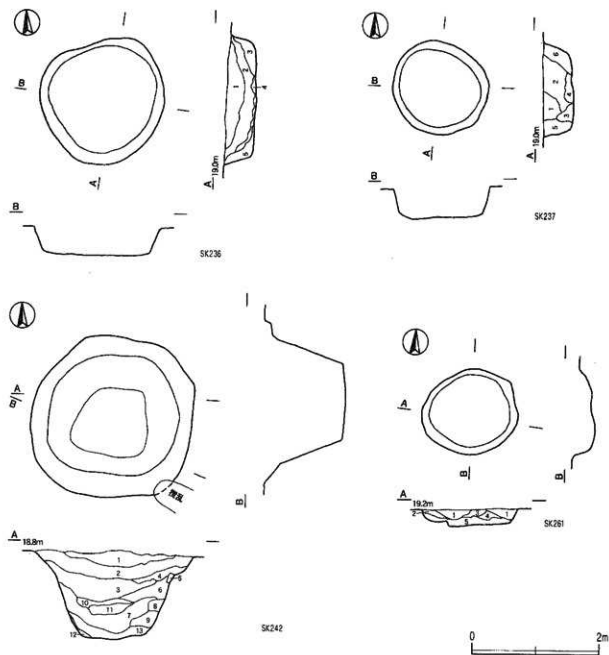
番号	位置	桁行方向	桁×梁 (m)	規模 (m)	面積 (㎡)	桁行柱間 (m)	柱 穴 (cm)					出土遺物	備考	
							構造	柱穴	平面形	長径(軸)	短径(軸)			深さ
14	B4B	N-67°-W	3×1	2.5×2.1	5.25	0.9	側柱	8	円形	21~40	18~36	7~24		13世紀後葉~14世紀前葉
15	C4a0	N-76°-W	3×1	2.1×1.8	3.78	0.6	側柱	8	円形	21~43	18~34	7~24		13世紀後葉~14世紀前葉

4 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期不明土坑6基、溝跡6条、柵列跡1条、道路跡1条を検出した。以下、遺構について記述する。

(1) 土坑 (第43図)

今回の調査では65基の土坑を確認し、時期の判断ができる4基(古墳時代3基、奈良時代1基)以外は、時期及び性格が不明である。中には古墳時代に見られた土坑と規模や形状が類似しているものがいくつか含まれる。ここでは、いくつかの不明土坑について実測図及び土層解説を記載し、その他の土坑については一覧表で示す。



第43図 第236・237・242・261号土坑実測図

第236号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 2 黒暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

第237号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗暗褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量

第242号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量
- 2 暗暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

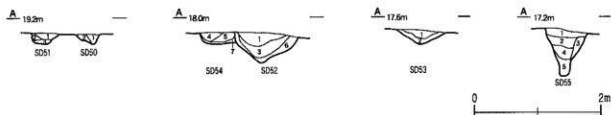
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量
- 9 黒褐色 ロームブロック中量
- 10 暗褐色 ロームブロック少量
- 11 褐色 ロームブロック少量
- 12 褐色 ローム粒子中量
- 13 黒色 ロームブロック微量

第261号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 暗暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

(2) 溝跡 (第4・44・45図)

今回の調査で、7条の溝跡を確認し、そのうち中世の1条以外は時期及び性格が不明なものである。第53号、第55号溝は、中世の遺構を掘り込んでいることから中世以降の区画溝と考えられる。以下、これらの遺構について、平面図は全体図に示し、土層断面図と一覧表を掲載する。



第44図 第50～55号溝跡実測図

第50号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量

第51号溝跡土層解説

- 1 暗暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量

第52・53・54号溝跡土層解説 (各溝共通)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック少量

第55号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量



第45図 第52・55号溝跡出土遺物実測図

第52号溝跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
614	環形器	環	-	(1.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	底部多方向へのヘラ削り	北西部底面	3% 磁粒付P.11

第55号溝跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
615	陶器	片口鉢	[34.0]	(4.8)	-	長石・石英・雑	にぶい褐色	普通	口縁部横ナゲ、体部外面ナゲ	覆土中	5%

(3) 横列跡

今回の調査では、時期不明の横列跡1条を検出した。以下、遺構について記述する。

第1号横列跡 (第46図)

位置 調査区西部のB3a4区に位置し、舌状台地縁辺部の緩斜面に立地している。

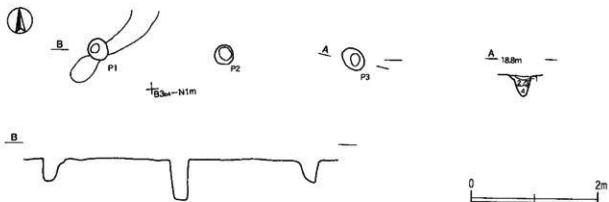
規模と形状 東西方向(N-83°-W)にビット3か所が直線上に位置している。柱間寸法は2.1mで、各ビットは垂直に掘り込まれており、深さは34~64cmある。

P3土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。



第46図 第1号横列跡実測図

(4) 道路跡

今回の調査では、1条の道路跡を確認した。近世以降のものと考えられるが、詳細については不明である。ここでは、平面図は全体図に示し、文章と土層断面図を掲載する。

第5号道路跡 (第4・47図)

位置 調査区東部B2i5~B2j5区に位置し、舌状台地縁辺部の緩斜面に立地している。

重複関係 第3号溝跡の覆土上層に構築されている。

規模と形状 南北方向(N-10°-E)に直線的に延びており、幅は0.5~0.8m、長さは9mほど確認されてい

る。

覆土 単一層である。自然堆積した第1層下面で硬化面が確認されている。(土層ポイントはSD-3のAと共通)

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 土層観察からは人為的に構築された様子は認められず、第3号溝に自然堆積した黒褐色土が、人の往来と共に踏み固められ、硬化したものと考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。



第47図 第5号道路跡実測図

表6 島名前野東遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	方位方向	平面形	縦 横		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 (旧→新)
				長さ(縦)・短径(横)(m)	深さ(cm)					
236	B 3 c2	-	円形	2.01	44	外傾	平坦	自然		
237	B 3 d4	-	円形	1.52	48	外傾	平坦	人為		本跡→SD-3
238	B 3 c3	N-35°-W	不定形	1.17×0.75	10	外傾	平坦	人為		
239	B 3 c3	N-43°-W	楕円形	0.64×0.43	23	外傾	平坦	人為		
240	B 3 c3	N-33°-E	楕円形	0.60×0.48	25	外傾	平坦	人為		
241	B 3 c3	N-13°-E	楕円形	0.65×0.47	19	緩斜	屈状	人為		
242	B 3 a3	-	円形	2.53	126	外傾	平坦	人為	土師器片	
243	B 3 c5	-	円形	0.6	5	外傾	平坦	自然		
244	B 2 j8	-	円形	0.41	40	外傾	平坦	自然	土師器片	
245	B 2 i7	-	円形	0.44	35	外傾	平坦	自然		
246	B 2 j7	N-33°-W	楕円形	0.60×0.49	20	緩斜	平坦	自然	土師器片	
247	B 2 j7	N-50°-W	楕円形	0.84×0.68	30	外傾	平坦	自然		
248	B 2 j7	N-53°-E	楕円形	0.89×0.79	46	外傾	平坦	自然	土師器片	
249	B 2 j6	N-61°-E	楕円形	0.39×0.32	13	外傾	平坦	自然		
250	B 2 j6	N-25°-W	隅丸方形	1.30×0.78	15	緩斜	屈状	人為		
251	B 3 d5	N-11°-E	長方形	0.62×0.54	22	外傾	平坦	自然		
252	B 3 d5	N-5°-E	楕円形	0.42×0.35	13	緩斜	屈状	自然		
253	B 2 j6	N-52°-W	楕円形	0.59×0.52	45	緩斜	平坦	人為		
254	B 2 j7	N-56°-E	楕円形	0.68×0.58	22	緩斜	屈状	人為		
255	C 2 a7	N-26°-W	楕円形	0.61×0.46	36	外傾	平坦	自然	土師器片	
256	B 2 j7	N-11°-W	楕円形	0.76×0.64	18	緩斜	屈状	人為		
257	B 2 j7	N-27°-W	楕円形	0.52×0.40	28	外傾	平坦	人為		
258	B 2 d8	-	楕円形	0.36×0.32	50	緩斜	平坦	人為		SD-51一本跡
259	B 3 e1	N-10°-E	楕円形	0.82×0.70	37	外傾	屈状	人為		SD-3一本跡
260	B 2 d0	N-64°-W	隅丸方形	0.75×0.57	32	外傾	平坦	人為		
261	B 2 d0	N-83°-W	楕円形	1.53×1.34	32	外傾	平坦	人為		

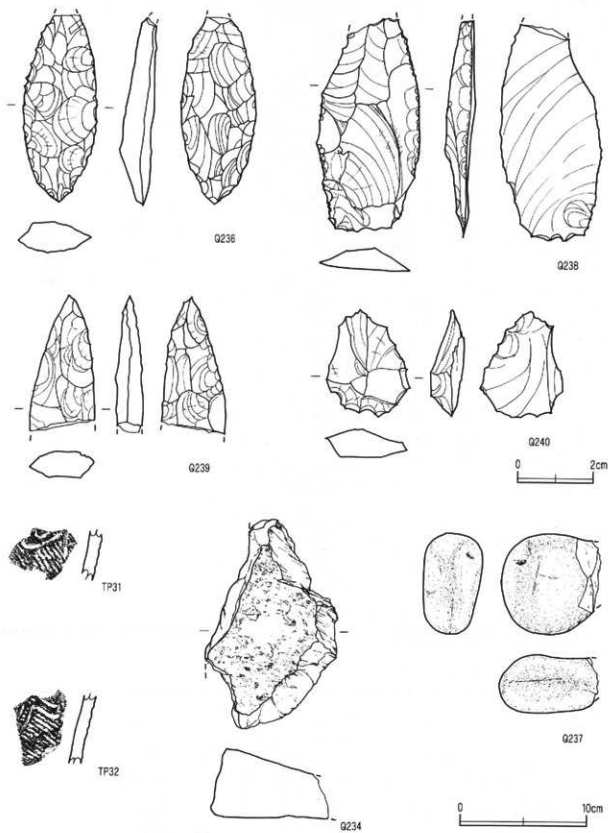
上城番号	位置	長径方向	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (旧→新)
				縦横×壁厚(m)	高さ(cm)	深さ					
263	B 2 08	N-27°-W	不定形	1.37×0.96	15	緩斜	平坦	人為			
265	B 2 09	-	円形	0.49	13	外傾	平坦	人為			
268	B 2 09	-	円形	0.27	23	外傾	平坦	人為			
269	B 2 09	N-7°-E	円形	0.42	25	外傾	平坦	人為			
270	B 2 e8	N-60°-W	楕円形	1.05×0.50	34	外傾	平坦	人為			
271	B 2 09	N-58°-W	楕円形	0.53×0.44	16	外傾	平坦	人為			
272	B 2 09	-	円形	0.3	10	外傾	平坦	人為			
273	B 2 09	N-86°-W	楕円形	0.60×0.45	14	外傾	平坦	人為			
274	B 3 f1	N-70°-E	楕円形	0.75×0.55	16	外傾	平坦	人為	土師器片		
275	B 3 g1	N-66°-W	楕円形	0.64×0.50	20	外傾	平坦	人為			
277	B 2 09	-	円形	0.44	25	外傾	平坦	人為			
278	B 2 g9	N-86°-W	楕円形	0.73×0.59	26	外傾	平坦	人為			
279	B 3 f1	N-91°-W	不定形	0.84×0.56	22	外傾	崖状	人為			
280	B 2 09	-	円形	0.53	30	外傾	平坦	人為			
281	B 2 g0	N-90°-E	楕円形	0.82×0.60	28	外傾	平坦	人為		SI-99→本跡	
284	B 2 g8	-	円形	0.26		外傾	平坦	不明		SI-94→本跡	
285	B 2 i6	-	円形	0.38		外傾	平坦	不明		SI-96→本跡	
287	B 2 j0	N-46°-E	楕円形	1.20×0.90	16	外傾	平坦	人為	土師器片		
288	B 2 i0	N-14°-W	不定形	4.48×1.12	28	外傾	平坦	人為	土師器片	本跡→SI-94	
291	B 3 i1	N-5°-W	楕円形	1.24×0.40	65	外傾	平坦	人為	土師器片	SI-100→本跡	
292	B 2 g9	-	円形	1.04	38	外傾	平坦	人為	土師器片	SI-94→本跡	
293	B 2 i0	-	円形	0.46	74	外傾	平坦	人為		SI-94→本跡	
295	B 4 j7	-	円形	0.8	22	外傾	平坦	人為			
296	B 3 i3	N-30°-W	楕円形	1.00×0.78	12	外傾	平坦	人為	土師器片	本跡→SI-98	
297	B 4 09	N-5°-E	楕円形	0.52×0.42	10	外傾	平坦	人為			
298	B 4 i7	-	円形	0.34	26	外傾	平坦	人為			
299	C 4 a0	-	円形	1	50	外傾	平坦	人為	土師器片		
300	B 4 i7	N-91°-W	楕円形	0.5×0.4	38	外傾	平坦	人為			
301	B 4 38	-	円形	0.42	21	外傾	平坦	人為			
302	B 4 i7	-	円形	0.52	18	緩斜	崖状	人為			
303	B 4 i7	-	円形	0.56	56	緩斜	崖状	人為			
304	B 4 i0	N-8°-W	不定形	2.00×1.32	30	外傾	平坦	人為			
305	B 4 j0	-	円形	0.2	11	外傾	崖状	人為			
306	O 4 a0	N-22°-E	楕円形	0.35×0.27	24	外傾	崖状	人為			
307	O 4 a0	-	円形	0.4	25	外傾	崖状	人為			

表7 鳥名前野東遺跡溝跡…覽表

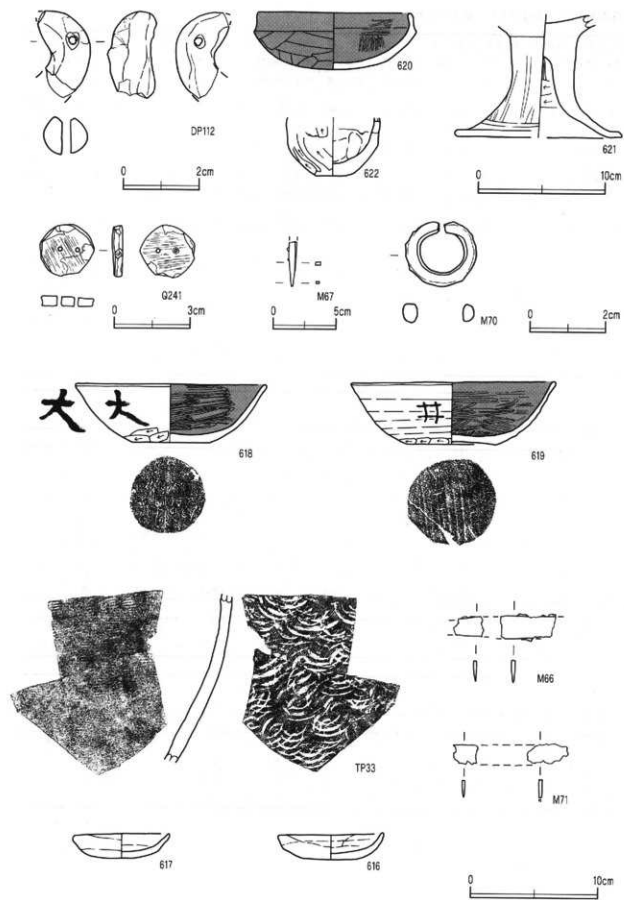
番号	位置	方 向	形状	規 模 (cm)				壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				溝底長(m)	上幅	下幅	深さ					
50	B 2 d7-B 2 e2	西→東	直線状	(22)	15~30	5~10	20~30	外傾	U字状	人為	土師器片(壺)	
51	B 2 d7-B 2 f2	西→東	直線状	(19)	15~40	5~15	40~50	外傾	U字状	自然	縄文土器片(深鉢), 陶器片	
52	C 4 a7-C 4 c0	西→東	L字状	(20)	25~55	15~25	35~40	緩斜	U字状	自然	土師器片(杯), 須恵器片(壺)	
53	C 4 a7-C 5 b2	西→東	L字状	(24)	25~55	10~20	25~35	緩斜	崖状	自然	土師器片(杯), 須恵器片(壺)	
54	C 4 b0-C 4 c0	北西→南東	弧状	(8)	20~30	10~20	20~25	緩斜	崖状	自然	土師器片(壺), 須恵器片(杯)	
55	C 5 b2-C 5 b0	西→東	L字状	(30)	25~55	10~15	35~90	外傾	U字状	自然	常滑片(鉢), 土師質土器	

5 遺構外出土遺物 (第48・49図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない主な遺物について、遺物観察表で記述する。



第48図 遺構外出土遺物実測図(1)



第49図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第48・49回)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
616	土師器 小皿	8.1	2.2	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナテ、腰部内・外面ナテ	SI-100覆土層	80%、PL12
617	土師器 小皿	7.5	2.0	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナテ、腰部内・外面ナテ	SI-100覆土層	85%
618	土師器 坏	14.9	4.7	6.1	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面下縁手持ちヘラ削り、底部回転ヘラ切り後多方向のヘラ削り	SI-80覆土層	70%、外側帯状(大)、PL13
619	土師器 坏	16.1	5.1	6.7	長石・石英・雲母	橙	普通	外面下縁手持ちヘラ削り、底部ヘラ削り	SI-80覆土層	95%、外側帯状(大)、PL13
620	土師器 坏	11.9	4.5	-	長石・石英	黒濁	普通	口縁部・内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り	SI-80覆土層	90%、PL12
621	土師器 高坏	-	(9.7)	[13.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄濁	普通	肩部外面ヘラ磨き、内面ヘラ磨削り	SI-80覆土層	50%
622	土師器 手捏土器	-	(4.6)	2.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	肩部外面ヘラ削り後ナテ、内面ナテ、内・外面輪磨み痕、指頭痕	SD-3覆土	40%
TP31	縄文土器 深鉢	-	(3.9)	-	長石、石英、雲母	橙	普通	LRの早期縄文、半截竹管状工具による流状沈線	SI-100覆土層	中期中葉、TP32と同一個体
TP32	縄文土器 深鉢	-	(5.4)	-	長石、石英、雲母	橙	普通	LRの早期縄文、縄文地に半截竹管状工具による流状沈線	SI-100覆土層	中期中葉
TP33	灰恵粉 大甕	-	13.5	-	長石、石英、黒色塵点	灰キリーブ	良好	外面腰部横位の平行叩き、内面同心円状の当て具痕	SI-100覆土層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP112	勾玉	(2.3)	(1.4)	1.1	(2.92)	長石・雲母	片面穿孔、ナテ	SD-3覆土層	PL13

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q234	石皿	(16.6)	(10.5)	(5.6)	(824)	凝灰岩	横断面が円心	SD-3覆土	
Q236	尖頭器	(4.9)	1.95	0.8	(7.3)	縄文頁岩	縦長割片を素材とした両面調整の本葉形尖頭器	B 4 17表土	PL14
Q237	磨石	8.1	(8.0)	4.6	(433)	砂岩	平面形は不整形、下部に使用痕	B 4 18表土	
Q238	ナイフ形石	(5.7)	2.7	0.6	(10.1)	縄文頁岩	素材の形をそのまま使用し、両側縁の片側だけ調整磨削	SI-80覆土層	PL14
Q239	尖頭器	(3.6)	(1.7)	(0.7)	(3.6)	縄文頁岩	縦長割片を素材とした両面調整の扇形尖頭器	SD-3覆土	PL14
Q240	割片	2.8	2.2	0.79	4.08	瑪瑙	背面には主要調整面に左からの割線	SI-104表土	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q241	瓦孔円板	2.1	0.4	0.2	2.72	滑石	表面斜位、裏面横位の傾斜痕	SI-103覆土	PL14

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M70	耳環	1.93	0.5	-	3.74	金・銅	環状で閉口部を設けている	SI-103覆土	PL14

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M66	鎌	(6.8)	1.8	0.3	(6.9)	鉄	刃先部・基部欠損	B 4 17表土	
M67	鉄鎌	(3.6)	(0.6)	(0.5)	(1.66)	鉄	断面長方形、裏城部	B 4 17表土	
M71	刀子	(5.2)	1.6	0.32	(4.84)	鉄	刃先部・基部欠損	B 4 17表土	

第4節 まとめ

当遺跡は、これまでも平成11～13年にかけて発掘調査が実施されている。その結果、竪穴住居跡72軒、掘立柱建物跡13棟、方形周溝墓3基、溝跡36条、井戸跡2基、地下式竈2基などが調査され、既に報告書も刊行されている。¹⁾ 今回の調査区は前回のさらに北側になり、新たに竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡6条、土坑65基が確認された。ここでは、遺構の中心時期となる古墳時代と中世について、前回の報告も踏まえ、さらに若干の考察を加えながらまとめたい。

1 古墳時代(第50・51図)

当遺跡における集落構成の中心となる時期である。遺構の分布図を見ると、前期は台地の裾部に集落を構え、中・後期になるにしたがい集落の位置が台地の平坦面に移っている。烏名前野遺跡は、今回の調査区と谷津を挟んだ北東側に位置する集落で、平成11年度に調査されており、ここでも同様の変遷が見られる。こうした一連の動きには、生活の変化に起因するところが大きいと考えられることから、各時期の①住居形態、②集落の立地、③生活の様相の特徴を捉え、総合して述べる。なお、便宜上大形住居は6mを超えるもの、中形住居は4～6m、小形住居を4m以下とした。また、平均値は計測可能な数値のみを使用した。

① 住居形態

I期(前期)

今回は北部の台地上の調査であるため、前期にあたる住居跡は確認できなかった。前回までの調査では10軒確認されている。住居跡の分布は、標高14～17mの台地裾部に集まっている。規模は、大形住居に該当するものではなく、8軒が中形住居で、ほとんどが一辺5m前後である。小形住居に該当するものは2軒で、形状はいずれも方形または長方形である。主軸方向は第44号住居跡以外は北西方向を向き、 $N-11^{\circ}-106^{\circ}-W$ でばらつきがある。貯蔵穴は4軒の住居で確認され、付設位置は、南東コーナ部付近や北東コーナ部付近、出入り口施設付近に多い。第31号住居跡においては出入り口施設と壁の間にピット状の堀り込みがあり、貯蔵穴の可能性も指摘できる。付設位置は、住居ごとに関わりを意識した配置になっていると考えられる。

II期(中期)

住居跡の立地は、今回の6軒を含め27軒が確認されている。住居跡は、前期と比較すると標高13～19mと広範囲に位置している。大形住居5軒、中形住居19軒、小形住居3軒で、大形住居を中心に3～4軒の小・中形住居が隣接していることから、5軒程度の集団を1単位とする小集団が形成され、いくつかの小集団が集落を構成していたと考えられる。当遺跡から約1km南西に位置する烏名ツバタ遺跡²⁾では、大形住居と小形住居のセット関係が報告されている。当遺跡でも第49号住居と第34号住居、第60号住居と第61号住居、第53号住居と第91号住居はそれぞれ隣接する位置にあり、軸線を同じとしていることから、セット関係にある可能性が指摘できる。主軸方向は第61号住居跡以外は北西を向き $N-0^{\circ}-56^{\circ}-W$ である。前期と比べると、主軸方向に統一性は見られないが、ばらつきが小さくなる。規模も前期よりやや大形化する傾向が見られ、貯蔵穴の付設位置は両側に多くなる。

III期(後期)

住居跡は今回の調査分を含めると26軒となり、標高17～19mの台地の平坦部に位置している。形態は大形住居11軒、中形住居12軒、小形住居3軒である。竈が住居の北壁中央部に付設されるようになり、貯蔵穴も竈を意識した北側のコーナ部付近が多くなる。住居には時期差が見られるが、竈の掘り方には共通点があるがえ



第51図 古墳時代後期の壱掘り方

る。火床部は床面を20cmほど皿状に掘りくぼめ、煙道部は壁外へ方形に30cmほど掘り込み、ローム土を主とする土で埋め戻し、成形していく方法が採られている。この方法はこの地域に見られる独特のもので、数世代にわたって継承されてきたと考えられる。このことからこの時期の集落は、複数の世代にわたって営まれていたと考えられる。また、集落の構成は、中期と同様に小集団の存在が確認できる。第100号住居跡は一辺が8mを越す大形の住居跡で、出土した土器から6世紀中葉と考えられる。その半径20m以内に同時期のものと考えられる第94・97号住居跡が隣接しており、主軸方向もほぼ同じで、セット関係にあると考えられる。また、第54号住居跡は6世紀後葉と考えられるが、半径20m以内に同時期と考えられる第56・90号住居跡が隣接している。後期では、3〜4軒を1単位とする小集団が集まり、集落を構成していたと考えられる。主軸方向はN-4°~65°-Wで、平均するとN-19.9°-Wとなり、ばらつきが小さくなる。以上のことからこの時期には小集団同士の連帯意識の強さが見られ、集落としての成長がうかがわれる。

② 集落の立地

当遺跡の集落は台地裾部の緩斜面に出現するが、作居の立地条件としては良くない。たとえ住居の周りに周堤を築き、雨水の浸入を防いだとしても、野外での行動を考えると平坦地の方が活動しやすいはずで、傾斜地に集落が営まれていることに対して何らかの理由を考える必要がある。

古代の生活を考える上で、欠かすことのできない問題が食料の確保である。食料の生産は集落維持の重要な要素となる。当遺跡でも、古墳時代前期の第31号住居跡から出土した土師器甕の底部片に、初め痕が確認されていることから、稲作が行われていたことが理解できる。しかし、水田稲作には技術が必要で、灌漑設備の整っていない当時としては、自然の地形を利用した谷津田での稲作となる。当遺跡では、そうしたことから水田の管理がしやすい低地に集落が成立していったものと考えられる。また、居住地域とは分けて、集落より標高が高い位置に方形周溝墓が3基確認されていることは、首長の有力者が存在していたことがうかがえ、この地域が古墳時代前期の開発主要地域の一つであったことが想定される。

後期になり、集落は台地上の平坦地に広がりを見せる。稲作とともに畑作も食料確保に大きな比重を占めていたと考えられることから、周辺開拓が進められ、畑作地が谷津田周辺の台地上に広がりを見せていったことが考えられ、この地における農耕の原型が繁かれた時期とも考えられる。

③ 生活の様子

水田稲作が行われるようになり、技術と労力が必要になる。特に灌漑施設を整備するとなると組織的な共同

作業が不可欠で、集団内にリーダー的人物の存在が求められる。集団の中心となった人物は必然的に富と権力を持つようになり、集落経営に乗り出していったと考えられる。集落経営の基盤は集落内の豊かな暮らし＝食料などの生産体制ということでも、水田稲作以外にも周辺の土地を利用して、畑作が行われていたと考えられる。畑作は水田稲作と違い、森林を伐採して開墾するにしても、大規模な灌漑設備の必要がなく、家族単位の労力でも対応できたのではないかと推測でき³¹、集落としての生産活動は比較的自由に行われていたと考えられる。当時の集落経営は、集落構成に明確な統一性が見られなかったことから考えても、外部的な制約は余り受けず、比較的自由度が高い経営が行われ、言い換えればその地域独自の方法が採られていたと思われる。畑での作物を特定することはできないが、第96号住居跡からは、破片の状態ではあるが、少なくとも7個の桃の種子が出土しており、周辺で栽培されていた可能性も考えられる。

集落内での生活は、住居の形態や生活習慣に共通性が見られ、集落内でのつながりを示す一つの資料となる。当遺跡の住居跡からは、石製模造品や土製品が出土している。出土状況を見ると、①焼失家屋から出土している。②埴・高坏・壺などと共存している。③炉や竈周辺、壁際、貯蔵穴付近など、ある場所からまとめて出土している。など、共通性が見出せる。このような状況から、当時の生活習慣に祭祀的な行為が位置づけられ、行われていたことが想定される。祭祀的行為には次にあげる二つの性格が推定される。「日常的に行われていた行為」と、「節目に行われていた行為」である。「日常的に行われていた行為」としては、当時の生活基盤となる農耕に関する祭祀行為で、広義では豊かな暮らしを願った行為である。もう一つの「節目に行われていた行為」とは、住居の廃絶時に伴う行為である。第51・89・96号住居跡は焼失住居であるが、出土した土器はほとんどが細片で量も少なく、不慮の火災というよりも意図的に火を放ったものと考えられる。第98号住居跡においては、竈が意図的に壊されたと思われる状況の中、周辺に勾玉や白玉などの土製品がまとめて出土しており、どのような意図の下で行われたかを知ることはできないが、当時の生活に大きな影響を及ぼす自然に対する崇拜が強かったことがうかがえ、土地を元に戻す＝「自然（神）に戻す」といった浄化的な考えの行為と考えられる。

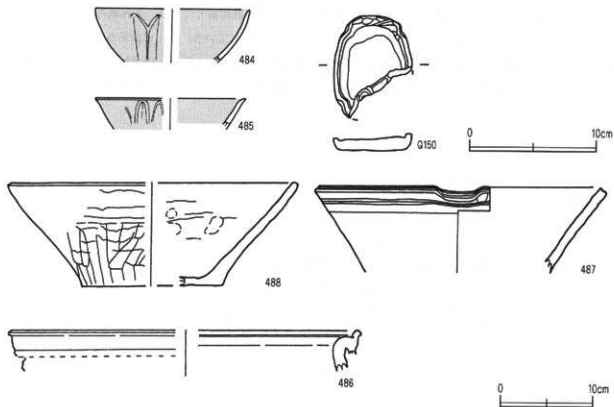
中期を中心に、住居跡から出土する祭祀的行為に使用されたと思われる石製模造品の材質は滑石で、当遺跡周辺では採集することができず、最も近い場所でも現在の日立市周辺になる。どのような経路・方法で流通していたのかは今後の課題であるが、いずれにしても当時、容易には手に入れることができない材質を使い、こうした行為が行われていたとするならば、祭祀的行為は、生活習慣の中でも重要視されていたということができよう。集落内では、こうした生活習慣にある共通性が見られることから、共同生活上に発生する役割分担が決められていた可能性もある。

2 中世（第52図）

南西部が未調査であるが、今回の調査で堀が一辺約110mの方形に巡っていることがほぼ判明した。中世前半にみられる典型的な形状を呈している。区画内では、掘立柱建物跡が7棟確認された。区画堀の内側に位置し、堀の軸線を意識した間取りになっており、出土遺物からも同時期のものと判断でき、開発領主の居居跡と考えられる。館内の空間構成を把握することはできないが、母屋に付随して納屋的な性格の施設跡や井戸跡なども確認されており、当時の生活を垣間見ることができる。

居住地に櫓や溝・堀などの区画施設を有する居住空間は弥生時代の環濠集落に見られるが、外敵からの防禦を目的とするばかりではなく、身分・権力などの政治的・社会的地位の象徴としての性格を併せ持つ中世の居館として、弥生時代の環濠集落とは性格を異にすると考えられる。

中世居館の出現は、これまで律令体制下で立場が保証され、政治的権力を強めていったと考えられる地方の



第52図 第3号溝跡出土遺物実測図

開発領主が、律令体制の衰退により、これまでの社会構造に歪みが生じ、不安定な状況から発生したと言われている。

今までの調査報告では東国と西国では差異が見られ、「東国では河川や大道に隣接した沖積地や段丘面・谷部に、小規模な溝で、一町・半町程度の規模で、不整形に区画された館が成立する。特に、段丘斜面を段切りして館を形成する形態や、河川に隣接して谷に立地する形態は、東国に特徴的な形態である。西国でも、堀で方半町規模に整然と区画した館が成立する。特に古代条里制施行地では、この区画が条里に一致する。この中には、開発領主の館あるいは荘官の館とされるものや、宗教的な社家の館とされるものなど多様な性格のものがある。空間構成に統一性は少ないが、掘立柱建物の規模・形状に共通性がある。」⁴¹とされている。

本跡からの出土遺物は、堀東側の土橋付近から一括投棄された状態で出土した大量の土師質土器や常滑片（6a～7型式）、龍泉窯青磁片、硯などがいずれも覆土中層から底面にかけて出土している。今回の調査区では、北東コーナ一部付近の自然堆積した覆土中層から白磁皿片が出土した。白磁皿片は、いわゆる口割け皿で、森田編年のⅤ類に相当し、⁴²時期は13世紀後葉～14世紀前葉と考えられる。

本跡で確認されている一町・半町規模の方形に区画された居館跡は小泉館跡⁴³、屋代B遺跡⁴⁴、白石遺跡⁴⁵が挙げられる。これら3遺跡は13～15世紀とされ、数期にわたり増改築が施され、「居館」から「城館・城郭」への変貌を遂げている。高名前野東遺跡は、14世紀前葉には廃絶していたと見られ、使用されていた期間も極めて短い。その意味で、戦国期の本格的な城館が出現するその前段階の動向を知る手がかりとなり、つくば高名地区の中世史を紐解く貴重な遺跡である。

西国における方形居館の存在は、12～13世紀まで遡る。山口県の大内氏館跡は、「土塁によって80m四方に区画され、その中には母屋と思われる4間×6間の掘立柱建物跡を中心に8棟の掘立柱建物跡が確認されてい

るが、文献上付近は八条院を本所とし、平頼盛を領家とする六人部荘に属しており、大内城の主は六人部荘を管理し、後に押領していく在地領主であろうと考えられる。』¹¹とされている。つくば島名地区は、八条院領の田中荘として『吾妻鏡』に現れるが、利根川、半久沼を経て移動してきた六杆党と呼ばれる人々が島名地区に居を構え、周辺を開拓していったという伝承もあり、大内氏館跡との類似点が多く興味が持たれる。

註

- 1) 田原 康司 「島名高野東遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集（上巻）2002年3月
- 2) 菅川 修 「島名フバタ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第203集2003年3月
- 3) 高橋 一夫 「古墳時代の研究2 集落と豪族居館」雄山閣 1994年6月
- 4) 小野 正敏 『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会 2001年3月
- 5) 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』丸臨社 1997年5月
- 6) 欠ノ倉 正男 「一般国道長高野筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 小泉館跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第97集 1995年3月
- 7) 佐藤 正好 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 屋代B遺跡Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第45集 1988年3月
- 8) 櫻村 宣行 「(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第82集 1993年3月
- 9) 石井 達ほか 「中世の城と考古学」新人物往来社 1992年12月

写 真 图 版



調査東区完掘状況



調査西区完掘状況



第96号住居跡
完掘状況



第96号住居跡
遺物出土状況



第99号住居跡
完掘状況

第99号住居跡
P4遺物出土状況



第90号住居跡
完掘状況



第90号住居跡
電掘り方



PL 4



第94号住居跡
完掘状況



第94号住居跡
遺物出土状況(1)



第94号住居跡
遺物出土状況(2)



第98号住居跡
完掘状況



第98号住居跡
遺物出土状況



第98号住居跡
竈掘り方



第100号住居跡
完掘状況



第100号住居跡
遺物出土状況

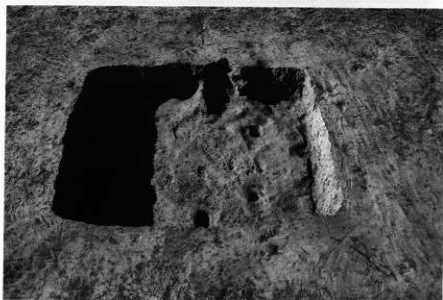


第104号住居跡
完掘状況

第104号住居跡
遺物出土状況



第102号住居跡
完掘状況



第102号住居跡
遺物出土状況





第283号土坑
遺物出土状況



第3号溝跡
完掘状況



第3号溝跡
土層セクションB



第53・89・94号住居跡出土遺物





SI 104-593



SI 104-594



SI 104-595



SI 93-528



SI 103-589



SI 93-526



SI 103-591



SI 93-527



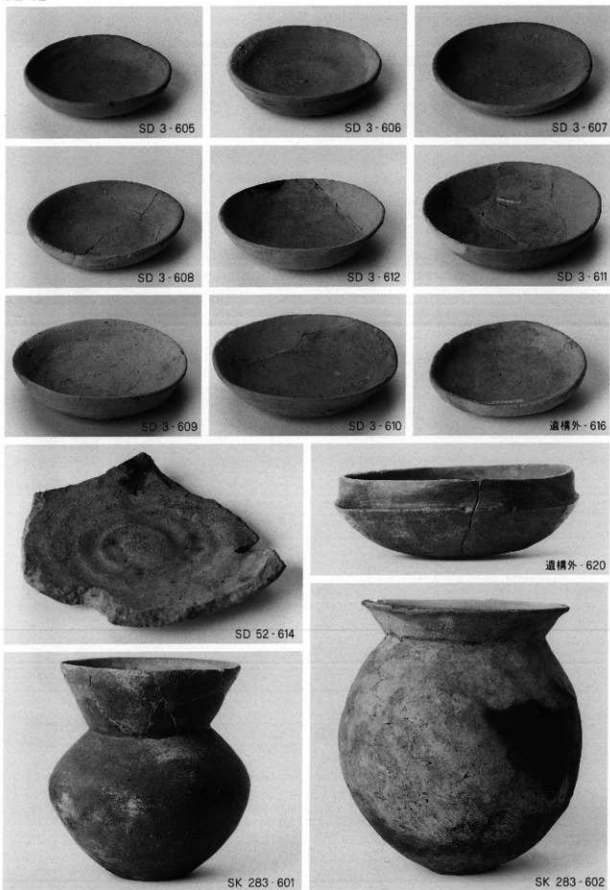
SI 103-592



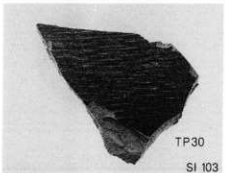
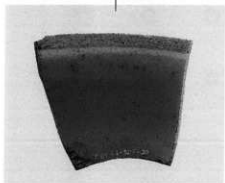
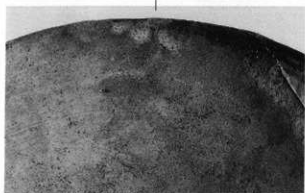
SK 276-598



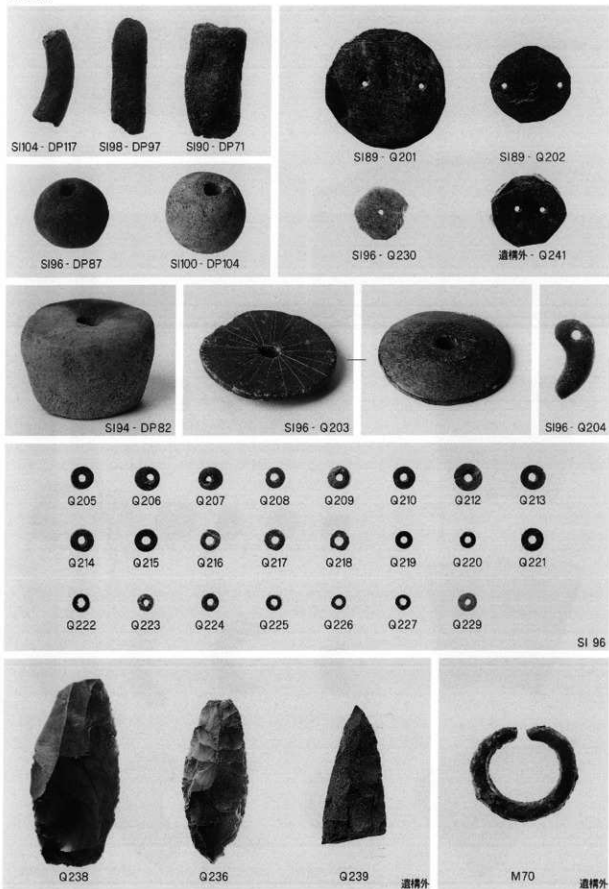
SK 276-599



第283号土坑，第3・52号溝跡，遺構外出土遺物



第90・94・98・103・104号住居跡，第3号溝跡，遺構外出土遺物



第89・90・94・96・98・100・104号住居跡，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第215集

鳥名前野東遺跡

平成16（2004）年3月24日印刷

平成16（2004）年3月26日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社
〒310-0012 水戸市城東1-5-21
TEL 029-221-4381